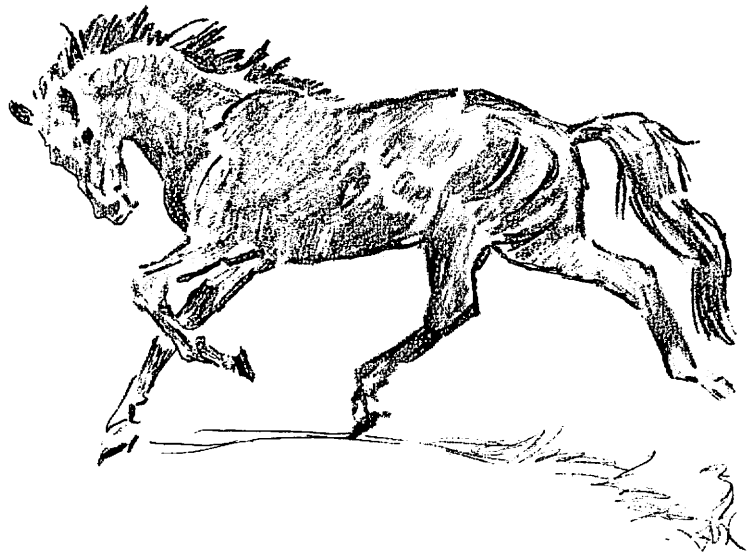
部報

北海道大学馬術部

昭和46年度



ポプラの葉音に合わせて
　遠くから馬のいななきが聞える

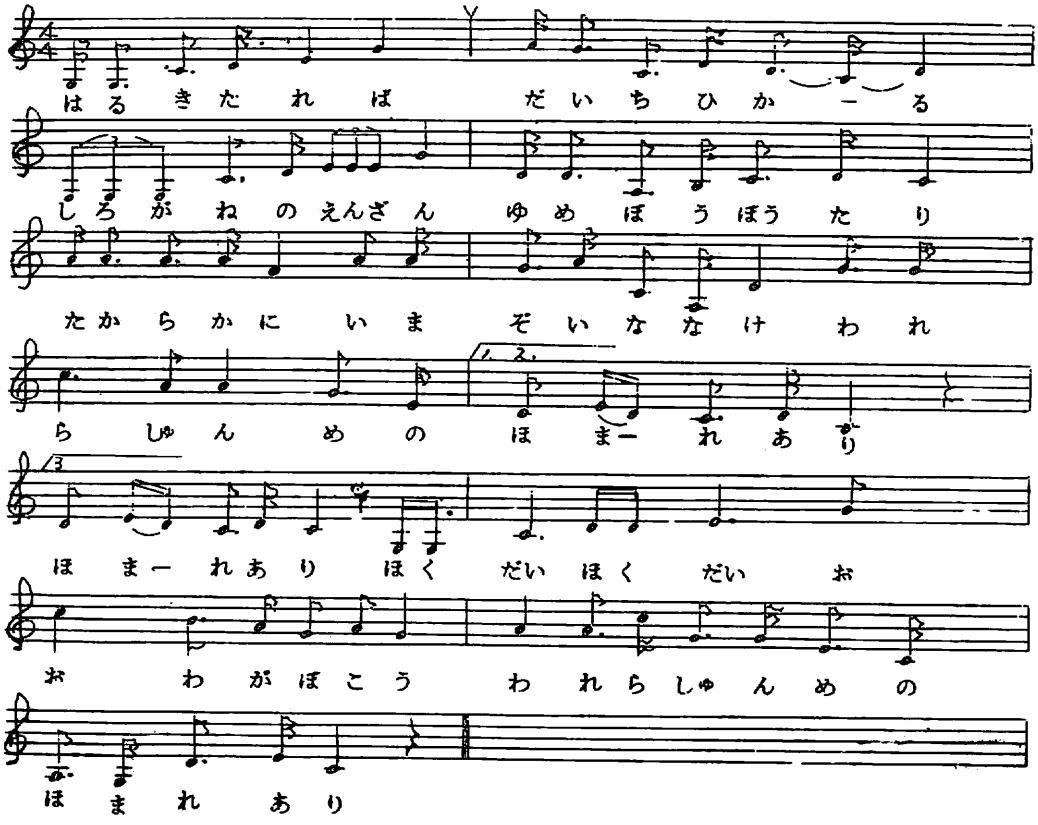
冷たい風の吹く中
　遠くから蹄の音が聞える

力強く歩む馬の姿がそこにある

青春の情熱を馬上に燃やす
　若人の姿がそこにある

北大馬術部讃歌

作詩　三浦清一郎
作曲　滝沢南海雄



北大馬術部讃歌

一、

春来たれば、大地光る
銀の遠山、夢茫々たり
高らかに　今ぞ嘶け！
われら駿馬のほまれあり

二、

時来たれば　旗をかざせ
青雲の旅路に　意気軒昂たり
高らかに　今ぞ嘶け！
われら駿馬のほまれあり

三、

雲流れて　旅路遥か
青春の孤杖　泥濘はばめど
凛然と　進みて行かむ
駿馬のほまれあるかぎり

北大！　北大！　おゝ我が母校
われら駿馬のほまれあり

目次

北大馬術部讃歌 …… 2
巻頭言 部長 半沢道郎 …… 5
再出発と題して 主将 田崎拓昭 …… 8
戦績及び行事報告 記録 景山博文 …… 10
会計報告 会計 近森憲助 …… 14
主務報告 主務 横山豊昭 …… 16
北勇号の報告 四年目 桝井明 …… 18
北瓔号調教報告 三年目 横山豊昭 …… 19
北凛号調教報告 五年目 松井亮 …… 19
北駿号調教報告 三年目 西村正二郎 …… 20
北隼号調教報告 三年目 西村正二郎 …… 20
北秀号調教報告 三年目 田崎拓昭 …… 21
北慧号離厩の報告 三年目 田崎拓昭 …… 22
同好会より 同好会幹事 …… 23
新厩舎紹介 …… 25
クラブ紹介 …… 27

卒業生の素顔 …… 30
在部生の素顔 …… 34

創作集

わが愛しの君　四年目　梶村哲世 …… 40
北大馬術方式の確立に向けて　四年目　桝井明 …… 42
日はまた沈む　三年目　西村正二郎 …… 44
ヤマトールの挽歌　一年目　花谷馨 …… 47
厩舎に棲息する動物　一年目　江口州志 …… 49
私の中の童話　ーさすらいのトムー　一年目　佐伯久美子 …… 50
ひとり思う事　一年目　宇野浩三 …… 51
ひとり旅の思い出　一年目　吉野勝之 …… 52

先輩寄稿 …… 53

初めての弓馬　荒木伸也 …… 55
学生馬術の限界　八木正己 …… 58
馬術部に期待する　佐合義弘 …… 60
先輩諸兄からのお便りを紹介します …… 61

名簿 …… 64
広告 …… 74
編集後記 …… 82

巻頭言

顧問教官　半澤道郎

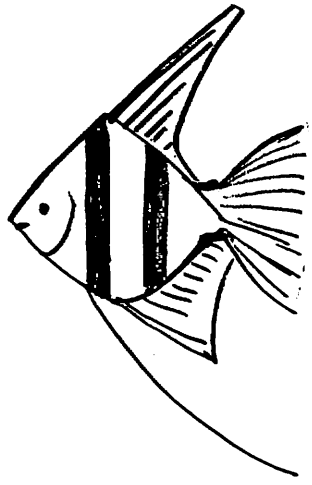
札幌市が人口百万を超え、指定都市に昇格し、区制が敷かれることとなり、冬期札幌オリンピックの開催によって名実共に世界の札幌になった。道路の舗装が進み、車の交通量が殖え、年毎に街乗をすることが困難になった。元日に初乗りで三年振りに北海道神宮（札幌神社）に参詣したが、乗用車で数名の部員の先導隊の援護と交通整理の警官のお世話によって、漸く社務所の庭に辿り着く有様で、何処でも自由に乗り廻わることのできた昔の札幌の街はもう殆んど無くなってしまって、全く隔世の感が深い。

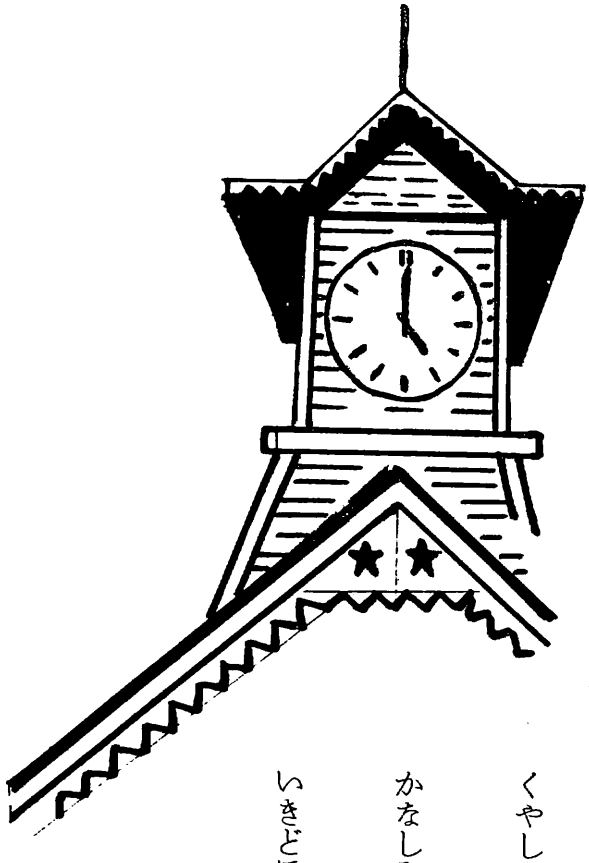
大学当局、文部省、文化庁、その他多くの関係者の方々の厚意と援助によって、多年念願していた馬場と厩舎の新築移転が実現し、旧第二農場の東南端の一角に、重要文化財になった旧第二農場の建物を背景に、昨年秋に落成した。晩秋の十一月二十三日、永井一夫初代部長をはじめ、来賓、先輩、多数のご参加を得て馬場開きを行った。馬場の内に祭壇を設けて、三吉神社の宮司によって修祓を厳粛に行ない、将来の繁栄と無事を祈った後、簡単な記念の障害飛越競技会を催し、午後には雪印健保会館で祝賀会を開いた。板垣札幌市長をはじめ多くの方々からお祝いを頂戴し、一同心から落成を祝った。馬場を造るのに当って、札幌市役所の建設局長になられた岡田光夫先輩から市の道路工事現場から多量の土を運んで頂き、前の札幌競馬場長の大木さんからは埒（らち）（馬場柵）の支柱の寄贈を受け、また馬場開きには障害をお祝いに頂いた。厩舎の建設にも大木場長から多くのご教示を頂いた。また厩舎の建設場所の選定については紆余曲折があったが結局施設委員長の大野工学部長のご配慮により現在の所に決まった。文化財用地との境界についても文化庁の厚意によってバドックが作られることになり、馬場の北側の空地の使用についても農場側の厚意を受け、更に馬場周辺の環境整備について農学部の明道教授に指示を仰き、演習林の援助を受けてその他佐合、小野両氏からも格別のご援助を頂いている。ポプラ、ライラック、オンコ等を植えて段々に整えることにしている。

馬場も厩舎も部室も少し狭いと考えられるが、欲を云えば限りが無いことで、先輩が旧い処でやって来た労苦を思んで、我慢をして大切に使って欲しい。一冬を過ごしてみて、前の所とは格段の違いがあり、人も馬も楽に活動が出来、休息もできたことと思う。

私が昭和二年に北大に入学し、翌三年の一月から馬術部の前身の北大乗馬会に入会してから足掛四十五年馬と付合い、昭和五年に文武会馬術部を作り、報国会騎道班、体育会馬術部と常に学生諸君と共に部の活動に参加して来たのであるが、この私の長い半生も明年三月定年退官とともにやがて終結することになった。今から丁度十年前に出された馬術部三十年史に「散重念」と題した私の抄文に『……近い将来にこの理想が実現されて、今後十年、二十年の間にわが馬術部が益々発展し、馬術部五十年史を出す頃には、世界に誇る北大馬術部の姿が、この北大の一角に輝いていることであろう。出来得ればこの眼で見度いものである。』と将来の夢を書いたが、退職前に微力を尽してその実現に協力し、実際にこの眼で見ることができたことは、誠に幸運であって、為すことの少なかった自分には記念すべき金字塔であると思っている。

部員諸君には関係各位の厚意と私の熱意に答え、新しい施設により、更に部の諸活動に精進、努力をして、馬術部の伝統を更に輝やかしいものに築き上げて下さることを切に期待する次第である。





よろこび　それは　力をつくすものの　知る　心

くやしさ　それは　一途なものの　知る　心

かなしみ　それは　愛するものの　知る　心

いきどほり　それは　人を信ずるものの　知る　心

今井敏郎

〃再出発〃と題して

主将　田崎拓昭

昨年、馬術部四十年の歴史をつちかってきた理学部横の厩舎。馬場から第二農場の一画に移転しました。移転に努力してくださった、半沢部長、先輩諸兄に対し、部員一同深く感謝しています。「一つのきっかけによって新規一転した時程相手として掲ろしいものはない」と誰かがいったものである。十月に新執行部として発足して以来、馬術部にもそのような要素がいくつかあったと思う。しかしそれをうまく生かすことができたかというと、必ずしもそうとはいえない。「低迷からの脱出」それは数年来馬術部の一致した大目標であった。これに対して我々は馬に乗っているということで満足していたのではあるまいか。『わが馬術部には、ある雰囲気があり風格がある。現在の馬術部の風格は、その伝統を背景として現部員が形成しているものである。従ってその発現は、現部員の栄光であると共に、その光輝の責任は現部員が負うべきものであろう。それはすなわち部員一人一人の日常の言行がつまり一人一人の人格が現在および将来の部をかたちづくるのであり、部員諸君はそういうことをよく考えて行動してほしい。』とはだいぶ前の半沢部長の言葉であるが、これは当然のことであると同時に現部員すべてが忘れ去っている重要なことであるように思える。我々はあまりにも自然の成りゆきとして一年、一年馬歴を重ね無造作に執行部を引きうけてしまったような気がする。馬術部始まって以来の悪態といえるような、一度に部員の三分の一近くを除籍するハメになった原因も前記のような点にあったのではなかろうか。しかし、こういう異常事態を踏み台とし我々は、新生馬術部、新しい秩序、の確立をめざして再出発しょうではないか。四年間は蕾が、花開く間もなく散ってしまうようなものである。大いに各部員の自覚を切望する。

同時に、我々の御術の未熟をいかにして解決していくかということが大きな課題である。八頭の白馬を擁しながらも、ある程度基礎のできた馬がみあたらず新馬の多い現在、部員三年目四名、一年目八名によって八馬共に向上していくことは、至難のわざといえよう。が幸いにも小栗コーチ以下在札O・B五名のかってなかったような、組織だった協力がある。我々はこれを大いに利用し、少しでも多くを吸収せねばならない。その為に、三月末日を一応の区切りとして、これまで役員交代以後すぐにとってきた確固たる白馬・馬配体制をでき得る限り柔軟にし、コーチ以下O・B諸兄の指示のもと部員の基礎技術の向上を第一としていきたい。これは四月下旬小栗コーチが日高へ行ってしまうことを考えると、何としても果たしておかねばならない。しかる後、今年の主要な競技会に向け、臨戦体制を実行していく。その一助として、春休み中に、合宿を行う。又去年より行なっている遠征を行ないたい。

前述のような理由で、流動的かつ複雑な馬配構成である為、この部報の調教報告では、各馬の現状、今年の競技会に対する姿勢調教の方針等、舌足らずの点がいろいろあると思いますが御了承ください。ここで部馬の状態について簡単に紹介します。

北瑛＝体力に不安を感じさせながらも、今まで一線で活躍してきた。昨年不注意から血腫をつくったがもう全快している。高令

であり、体力もそんなにある馬ではないが、運動量を考慮するなど馬体管理に十分注意しつつ、多くの部員がこの馬からより多くを学びとれるよう配慮してゆきたい。

北晨＝昨年の北日本学生、道大では、ひとり気をはいた馬であるがその後、後肢の跛行がなおらない。北晨の飛節内腫はいまに始まったことではないが、冬期からの跛行は今までなかったようた。しばらく様子をみ、練習に耐えられない場合離厩の可能性もある。

北隼＝旧馬場では足の故障が絶えなかったのであるが、新馬場に移ってそれもなくなった。今まで新馬としてすべて小栗コーチにまかせきりであったが、四月下旬に小栗コーチが数ケ月日高に行かれるので、それまでの間に、馬体管理・馬の性質、さらに現在の調教の段階、これからの方法等確実に引きついでいかねばならない。そして何としても今年はすばらしいデビューができるよう努力する。

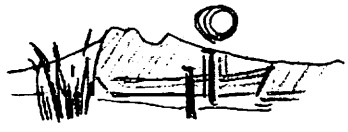
北秀＝昨年の成績は思わしくない。年令的にいってもこれから活躍しなければならない馬である。一月に骨瘤ができ、その後たいした運動を行なっていない。当分は並歩騎乗に重点をおき、順致を十分やって行く。二年前、堤兄がなされた事以上に迄もって行くよう努力する。

北驤・北凜＝ともに体力がある。少々きつい運動をやっても故障をおこさない。北驤はもう十八才以上であるが、練習馬として十分活用していきたい。

千里馬・北勇＝両馬とも昨冬入厩した馬である。千里馬は、一月の競馬場での競技会でみごとな飛越をみせてくれた。これ迄調教された梶村兄に感謝している。馬格の小さいのは難点であるが、梶村兄の方針を踏襲しつつ、より以上の馬になるよう注意を払っていきたい。北勇は去年不注意により左目失明してしまった。このハンデをのりこえるべく努力するが、他馬との比較によっては離厩の可能性もある。

以上自馬八頭について述べたが、我部の財政からいっても、八頭というのは妥当な線だと思われる。一時的に七頭あるいは九頭となる事があっても基本線は守って行きたい。

最後に昨年十月、大阪服部乗馬クラブの吉岡氏、岩坪氏の御厚意により、吉岡氏の白馬・山透号を寄贈してもらいました。しかしながら、十一月十四日練習時事故をおこし、頸椎不全骨折の為薬殺いたしました。山透号の冥福を祈ると共に紙面を借りて深くおわび申し上げます。



戦績及び行事報告

（昭和４６年４月～４７年３月）

記録係　景　山　博　文

４月１９日　　新入生歓迎デモンストレーション（新入部員　計１８名）

５月　３日　　○競馬場馬場開き馬術大会（於　札幌競馬場）

５月　４日　　新入部員歓迎コンパ（於　クラーク会館）

５月１６日　　○対酪農大学定期戦（於　北大馬場）　　北大の勝

複合

北彗（梶村）　一位

北秀（大見）

中障碍飛越競技

北晨（桝井）　一位

北秀（大見）　三位

北瑛（田崎）　四位

小障碍飛越競技

北彗（則近）　失権

北秀（中川）　二位

7月　4日　○北海道白馬大会（於　札幌競馬場）

複合

北瓔（田崎）　一位

北秀（大見）　失権

北晨（桝井）　失権

北彗（横山）　失権

北驃（西村）　失権

北凛（今井）　失権

7月12日～19日　一年目日高合宿（於　農学部付属日高実験牧場）

7月30日～3日　○北日本学生馬術大会（於　北里大学）

総合馬術

北彗（梶村）　失権

北晨（桝井）　失権※

北驃（西村）　失権

北凛（今井）　失権

北秀（太見）　失権

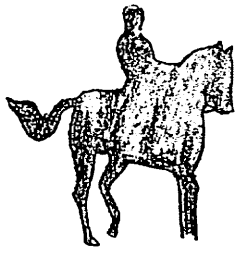
標準中障碍飛越競技

北瓔（田崎）　失権

北秀（太見）　失権

北晨（桝井）　失権

※余力審査時ゴールした後下馬して退場したので失権と見なされたが全日本学生馬術大会の出場権は得た。



8月14日
～15日　　○北海道馬術大会（於　旭川近文公園特設馬場）

複合馬術競技

北凛（今井）　失権

北秀（大見）　　位

北瓔（梶村）　六位

北駒（西村）　失権

中障碍飛越競技

北秀（大見）　失権

北晟（桝井）　十位

北瓔（田崎）　失権

新人障碍

北晟（則近）　二位

北駒（中川）　失権

北彗（横山）　失権

9月15日　　○スタンド改築記念馬術大会（於　札幌競馬場）

7月～9月　　中央競馬アルバイト

9月29日　　山透入厩

10月3日　　遠乗会（十銭浜）

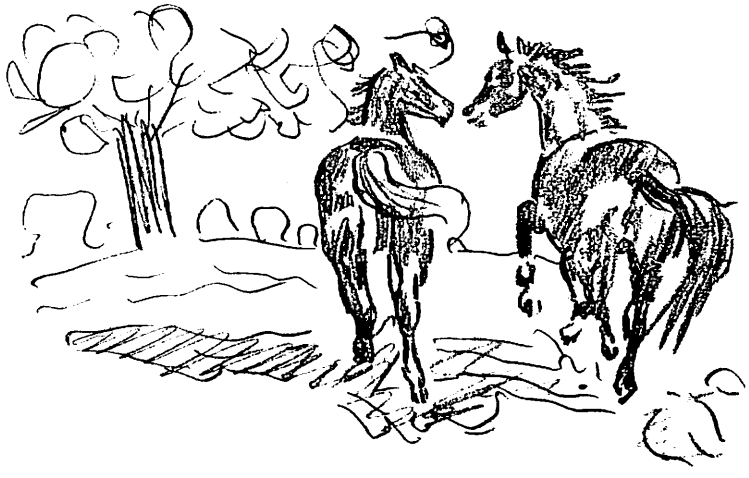
10月8日　　役員交代コンパ

10月9日　　北彗別離厩（井上愛馬クラブへ）

10月
～11月　　道営競馬アルバイト

１１月１３日	雪嶺離厩
１１月１４日	山透事故死
１１月２０日 ～２１日	新厩舎移転作業
１１月２３日	○新馬場及び新厩舎移転記念馬術大会（於　北大新馬場）
１月４日～９日	三年目合宿
１月１５日	○札幌雪上馬術大会
１月２０日	新年会（於　クラーク会館）
２月２１日	高橋留次郎氏別馬術大会（於　札幌競馬場）

※七大戦は本年度は中止となった。



昭和46年度会計報告

会計　近森憲助

まず最初にお詫びしなければならないことは、私が会計を引き継ぐまでの帳簿が盗難にあい、昭和四十六年四月より九月までの正確な会計報告ができないことです。したがいまして、事務手続上は、私が会計を引き継ぎました際に、手元にありました金が約五八万余円でしたので、それをそのまま帳簿に記載して、九月より、帳簿をつけはじめた訳です。私共の不注意によりまして、四月より九月までの正確な会計報告ができないことを、あらためてお詫び申しあげます。

さて、昭和四十六年度の財政は、例年通り苦しく特に今年は、四月において約四十万の赤字が推定されました。部員一人より夏休みにアルバイト等で一人当り一万円の負担金を徴収し、又役員交代前十頭おりました馬を二頭離厩させることにより、飼料代を減少させました。そのようにした結果昭和四十七年一月現在赤字は当初見込の約半分の二十万に減少いたしました。今後大きな出費がある場合例えば遠征等などにおいては、予算をたてるなどして、できるだけ無駄な出費を控えるようにしたいと思ってます。又部員の滞納金もできるだけ早く回収したいと考えております。しかしエン麦をはじめ、種々のものが値上りすることも予想され、今後も部財政は予断を許されないものと思われます。会計の詳細につきましては別表記載の通りであります。

	9月	10月	11月	12月	1月	
収入合計	605,974	737,729	1,032,077	890,572	731,902	1,330,718
部費	20,000	14,000	13,000	11,000	1,500	59,500
その他	11,166	289,615	296,528	94,481	4,600	696,390
支出合計	171,680	15,380	246,986	164,770	4,925	603,741
鉄代	99,000	0	65,300	32,000	0	196,300
飼料	0	0	0	70,000	0	70,000
薬品	0	325	1,155	590	0	2,070
馬具	32,680	540	104,470	0	0	105,010
備品		623	17,515	1,500	735	20,373
事務費		300	30,770	6,140	0	37,210
雑費	40,000	11,310	9,797	53,740	4,190	119,037
その他		2,282	17,979	800	0	21,061
前月繰越	574,828	434,314	722,549	785,091	725,802	726,977…残

昭和47年1月現在
152,149円・黒字

収入内訳表	
学馬連よりの補助金	412,000
アルバイト	306,560
部費	59,500
個人負担金	184,200
後援会からの援助	93,000
雑収入	275,458
計	1,330,718

右の通り御報告申し上げます。

尚、残額二六二〇六円は部会計に入れ、部屋引越しの際の支出、あるいは新しい備品の購入にあてました。

馬場開き祝賀会決算報告

収入	植村勘一氏より（後援会費として）	10,000
	東京OB会より	50,000
	当日会費	45,000
	その他	23,000
	計	128,000
支出		
	案内状製作費	2,760
	交通費	1,640
	通信費	4,425
	試合用品費	13,160
	会場費	67,230
	修復式費用	3,000
	フイルム代	840
	その他（弁当代etc）	9,737
		102,794
		25,206円……黒字

暮しの中の小休止

コーヒーのある生活

画廊喫茶　タマキ

北18西4　731－4890

主務報告

主務　横山豊昭

昨年の九月に主務になってから半年、これと云って倶楽部の利益となる仕事は出来ませんでしたが、この先一年間、私の働きいかんによっては、部員が苦しむこともまた楽になることも出来るのですから、一生懸命やっていきたいと思っています。

前年度までは、主務が会計を兼任したり、また会計は主務に付属して金銭の出納が主任務となっていましたが、今年、会計は完全に独立して金をがっちり握っていますので、金のことに心配せずに仕事が出来ると思っています。

私の下で働いてくれる副務の吉野君と相川君を紹介しておきます。吉野君は大坂出身らしく、そのガメツさで獲物をごっぽごっぽと獲ってくれますし、相川君は江戸っ子らしくはっきりしています。両君とも素直にきいてくれるので助かります。

次に項目別に報告します。

学生部関係

学生部からの飼料代援助は、今年度（昭和47年3月まで）約70万円がおりました。現在の一頭分の飼料代が約14万円ですので、5頭分としては丁度の金額になっています。しかし目下、学生部の予算の大巾削減に伴なう体育会への援助削減によって、十万円前後の減額は必至と見られています。この問題については、半沢部長も御執心して下さり、過日も学生部長のとこへ馬術部の特殊性を考慮して善処してほしいと頼みに行ってきたのですが、どうなることかわかりません。兎角少なくとも現状維持は達成したいと思っています。又毎年約三万の物品援助も受けていますが、これも減額されないようにする積りです。

赤字解消問題関係

昨年の8月末現在で約40万円の飼料代未納がありました。試算の結果、11頭の繋養馬を三頭減らして8頭にすれば、あとはアルバイトでまかなえる目算がついたので、11月末現在で8頭にしました。今後8頭以上の繋養は当分の間不可能だと思います。現在部員数も12人と少ないので、部馬数を可能な限り整理して、新馬購入に充てるのが得策かと思っています。

アルバイト関係例年の如く

昨年の10月に札幌競馬場でアルバイトをした。収入約30万円であった。今年も同様のアルバイトを予定しています。また石狩浜の牧場で乾草支給の口もあります。それと同時に、夏の乾草作りもアルバイトなので草刈り等頑張って下さい。お願いします。

新馬場・厩舎関係

長年の懸案となっていた馬場・厩舎の移転問題は、昨年の夏に具体化し、半沢部長はじめ今年、大見両兄並み並みならぬご努力の結果、11月21日に無事完成致しました。どうも有難うございました。

概要は次のとおりです。

新馬場（砂馬場）60×65＝3,900㎡　これに650㎡の三角地が付いている。

新厩舎　木造2階建、一階　馬房・男女部室・便所・鞍置場
二階飼料庫・合宿用宿泊所

場所は北18条西七丁目、18条通りに面し、重要文化財のモデルバーンの真前です。来札の折には是非立寄ってください。

山透号関係

岩坪氏の御尽力により、また吉岡忠夫氏のご好意により同氏所有の山透号は昨年9月30日入厩致しました。大人しくて、良家の子息といった感じの山透は、部員にも可愛いがられ、部員にも馴れてこれから再び大きく成長すると期待されましたが、不幸にも11月14日不慮の事故死を遂げました。全く残念でたまりません。

吉岡氏及び岩坪氏にはお詫びのいいようもありません。心から山透の冥福を祈っています。

部長問題関係

長年、倶楽部の部長としてご尽力くだされた半沢部長が、今年をもって、御退官となられます。私としましては、先生、諸先輩の方たちとも相談致しまして、速やかに解決致したいと思っております。後援会の皆様には追ってご連絡致します。

後援会関係

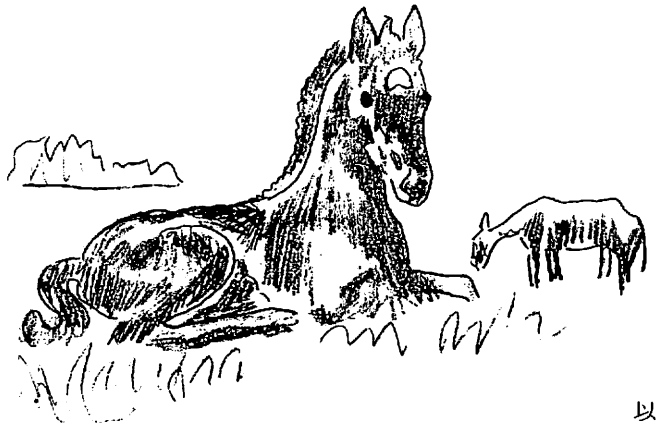
後援会員の皆様には、いつもご無沙汰ばかりで済みません。今まで何かと名前のみで、実際の関係が薄かったように思いますので、これからは、倶楽部の問題や遠征・試合等の日程など、そのつど報告して少しでも部員との接触の機会を多くしたいと考えております。どうか宜しくお願い致します。また後援会名簿も転宅等による変更がございましたら、ご報告ください。私たちはより完全な名簿を作っていきたいと思っています。

財政の方も楽ではありませんので、後援会費の納入をよろしくおねがい致します。また未熟な私たちですので、先輩諸氏の貴重な体験や御意見・御指導を待っています。

おわりに

倶楽部の運営上問題となるのは、主務の立場から云えば、財政的にいかに余裕を持たせるかということである。このために、少しでも得になることがあれば、それに急行し、全力投球しなければならない。このようなことに常に留意していることは、誠に多忙である。部員数も少なく人手が足りないかも知れないが、そこは部員が一致協力して、補充してくれることを切に望むのであり、また後援会・先輩諸氏の多大のご指導、ご鞭撻を期待する次第です。

以上



北勇号の報告

桝井　明

本文を報告するにあたって、その前に一言お詫び致します。前号にて紹介しました雪嶺号について、本田先輩に無責任に預けてしまったこと深く反省しております。

北勇号については責任者が2人程交替していますので、12月に乗りだした頃には、調教の進み工合いが定かではありませんでした。12月の時点でも責任者がなくなり、乗る人も少ないため、僕が毎日乗る次第となった訳です。前置きはこの辺にして、北勇号について気付いた点を述べてみたいと思います。

馴致について、馬場から外へ出ると帰ろう帰ろうとします。車には殆んど驚く様な事はないのですが、止まっている車などに、急に出くわすと大変に驚きます。外乗している時は努めて興奮しないように又、脚で馬をせかせかさせぬように心掛けています。約一時間半の練習時間のうち初めか、おしまいの三〇分は外に出るようにしています。最近では、馬が歩きながらボトリボトリと落とし回るので構内を歩かない様に注意されることもあって次第に住みにくさを感ぜずには居れなくなりました。

諸運動について、トロッターで前へはよく出ていきます。速歩では時々巻き込んで、ハメを外すことがあり脚によって前に出ていない様子がみられます。口笛による停止、速歩―常歩がうまくいっているので口に苦痛を与えることが少なくてすみます。今一番の課題は駈歩です。初めの頃は蹄跡の直線上で駈歩発進の練習に努め、更に駈歩を持続させるところまでは、大体でき得る様になりました。ただ、駈歩に出すと、急ごう急ごうとして少し興奮気味になります。下の状態が不良だったり、騎手が追い過ぎる欠点が原因とも考えられます。僕としては、不正駈歩になってしまうので結果的に追う恰好になるのかと自問しているところです。トロッターのためか、駈歩は、体をのばしきった様な、後躯が入ってこない感じです。ハミは軽く受ける様に努め、頭頸の位置を自由にしてやり、駈歩の歩様に馴じむ様にしています。左右を比べると、左目の見えぬ左手前の方が不得手なので、左手前を多くする必要があると思います。雪が深くて毎日、駈歩が出来る訳でもないですが主なる課目として駈歩をする事にしています。出来れば大きい円蹄跡でやろうと思うのですが、二～三日おきに雪で埋まるので出来ずじまいです。

障碍調教について、雪の少ない時には五〇～六〇センチくらいのを速歩通過させていましたが近頃では全くやっておりません。飛越時の馬の姿勢は新馬の様に頸を弓状にする様なこと少なく、ややもすると鼻を突き出した恰好で、ハミに支店を求める感じは少ない。巾障碍の必要多いに痛感。駈歩飛越は駈歩が安定してからやるつもりでいます。

以上、北勇号に関して三ヵ月余りの騎乗で感じ取った事と感想を述べました。これからの予定もしくは方向性について、雪が消えて、もっと運動できる様になるまでは馴致と駈歩練習に努める。条件が良くなってくれば春先から飛越練習を本格化させようと思う。北勇号に騎乗する人は、馬が興奮しない様にすることと、ハミに突っかかることをさせない点に注意して下さい。

北瓔号調教記録

四年目　横山豊昭

北瓔は、今年で明け18才の古馬ですが、まだまだ飛越能力は落ちていないし、調教いかんでは中障碍でも立派に通用すると思います。昨年10月、私の不注意から右臀部に大きな血腫をつくり、まる一ヵ月馬休しました。これは大きな影きょうはないと思っていますが心配です。　月から約3ヵ月間、下級生の部班運動に主に使ってきましたが、これからは、上級生が乗って、今夏に備えたいと思っています。

まず老令ですので、酷使はできません。無理のない運動で、密度を濃くしなければなりません。先輩コーチの指示を仰ぎながら、また自分でも考えて、試合に臨めるようにしたいと思っています。具体的には云えませんが、馴致、外（街）乗を多くして、組織だった、切れ間のない調教を一貫したいと思っています。

以上

北凛号調教報告

調教と言える程の事はさっぱりできてないのだが、一応今までの経過を述べる。去年秋に乗り始めた頃は速歩の歩度が伸びない事とよく反抗する事が目立っていた。広い野原で駈歩をやっても、走るのが嫌で横へ逃げたがる傾向があった。しばらく乗っていなくて乗手の腕も落ちているのであせってつい乱暴な脚を使うこともあったが、こういう時こそ、急がば回れでじっくり乗るべきかも知れない。しかし今年になってから、かなり歩度も伸びるようになった。脚に対して従順にさせる為停止からの活発な常、速、駈歩の発進、急激な歩度の伸長などを要求してなるべく反応時間が短かくなるよう努めた。もともとのみこみは速い馬だから、停止→駈歩の発進など、内方脚を当てると同時に胸のすくように前肢がとびだす事もあった。しかしそれがなかなか続かないのが欠点である。それから騎手がのめった時によく止まるのでそれを直す為、前傾したまま走らせたり、馬上でいろいろ動いて一方の鐙に乗って駈歩をやったりした。しかしこれはいわゆる馬術からは外れるかも知れない。以前は停止すると馬の緊張がゆるんでしまって馬体が後へ下がるような感じであったが、こういう時脚で緊張させ、また上記のような練習をくり返しているうち、停止の瞬間から馬体が動かず、背が隆起したような感覚で乗り手としては山の頂上にぽつんと立ったような感じになった。元来下級生が乗った後などはよく頭を上げて非常に怠慢していたようだが、今井

君が顎を譲らせる練習をした後に乗るとかなり頸が安定している事がわかったまた練習の初めは手綱を長くして主に脚だけで馬を動かすという彼のやり方も一定効果を生んでいるようだ。しかし、また逆に最初から上級生がのって部班をやり、かなり強い支点で歩度の伸縮を要求した場合もよく頸を下げ、街に非常に出るようになる。この二つの組合わせで練習を持続したらいいのではないかと思う。つい最近だが、距離10m50で単一バーを四つ作って連続飛越を試みた。最初は全部高さ一mでやったら馬はちょっととまどったようだった。（最初の障害の踏切が合わず二回ほど止まられた。）こういう障害はとびにくいから、60cmくらいから始めるべきだったと思う。四つ目の障害では必ず距離がつまって落下してしまう。それで四つ目の障害だけ50cmくらい遠くおいた所無事通過した。最初の二つくらいはリズムがわからなくてちょこちょこ走り、後半には加速歩もあってストライドが伸びると思われる。これから頻繁にやらせてリズムを覚えさせるつもりである。

昭和三十九年、当時の在札OBの援助により入厩その後、田中力先輩、本田先輩などの努力により、四十三年、数々の試合で活躍しましたが、現在の状態から、小栗コーチと相談した結果昨年離厩いたしました。現在、江別市角山の井之上愛馬クラブの乗用馬となっております。

簡単ですが離厩の御報告といたします。

二人の世界

――北驟のこと――

西村　正二郎

公式の試合で、僕と北驟はゴールを切ったことがないのです。が、敗軍の将が何を考えて騎っていたかを知ることも、何かの足にはなるでしょう。

巾のない障碍を個々に飛ぶことは意味がないと思う。小栗さんの号令で、80 m の単一を 3 m 間隔で 3～4 本置いたものを速歩通過させたが、良く頭頸を使う。

これは畜大の人から聞いてやったことだが、バンケットの前に単一を置いた兎跳び、水滴と高さのある障碍を組み合わせた連続飛越も、頭頸を使わしめるのに効果がある。

障碍前で推進が弱いと、一歩多く踏込んで、全くスピードを殺した弾力のない跳び方（山羊跳び？）をする。低い巾障碍をある程度スピードで通過させるのは大事だと思う。

北驟は自分で前へ出る時の方が恐い、油断出来ない。こんな時は寧ろ、拳をしっかりおさえて（実際には引張っていたのでしょう）一生懸命脚を使った。野外騎乗では、恩田さんが部報に書かれている様に、障碍の 20～30 m 手前で一度止めるくらいのつもりで騎った。理想の状態からは程遠いが、こうした方が良く飛んだ様に思う。

漸進的に強くなってゆく脚、北驟の飛越をなめらかに行わせる為にこのことは必要だと思う。僕はこれが出来ずに、勢い障碍前で強打、拍車に頼り北驟の飛越を阻害したのじゃないかと思う。

これから騎る人には注意して欲しい。

「彼は極端に孤独を嫌う。重労働には耐えても孤独には能う耐えぬらしい」と云うことを、しきりに日誌に書いているが、北驟には非常に内弁慶的なところがある。見知らぬ場所や試合場では普段とは全く違った様相を呈す。単騎で行う馴致をもっと重視すべきであったと思う。それも構内ではなく、市街地を。彼には嫌いなものが多過ぎるのです。鼻ねじが嫌い、注射が嫌い、水濠が嫌い、オクターブの高い金属音が嫌い、北晨が好き。

部班などで下級生を騎せてひたむきに走る姿は、僕の目にはゴルゴタの丘へ十字架を運ぶキリストの様にも見えますが、これから先何年も頑張って欲しいです、北驟には。

〃デコ〃の近況《北秀》

四年目　田崎拓昭

九月末、それまで主として北　に騎乗、練習していたが、以後大見兄より北秀を引き継いだ、とはいっても大見兄との北秀に関する引き継ぎは必ずしもうまくいかなかった。それまで北秀という馬に関心をあまりもたなかったせいもあり、この馬について多くを知っていなかった。こういう状態で自信はなかったが何とかなるだろうというような安易な気持ちで、十月の札幌競馬場での競技会に参加、そして準備運動中駈歩でなかなか馬を手の内に入れられず、速歩で経路を回り失権、その後十一月の馬場開きでも失権、山秀号の死などであまり北秀に乗り込まなかったとはいえこれですっかり北秀を乗りこなす自信を失ってしまった。その後小栗コーチに人馬共に特訓を行なってもらったが、結果は馬が脚に鈍感になり、ハミにおもってくるようになってしまった。拍車にたよった推進、安定しない挙でハミをうけようとしてやたらとハミをひっぱるなど、馬を調教しようなどという前にまず騎手の未熟さが目につく、これは当面自分が克服すべき重大時であるが現在自分の考えていることを述べて、おそまつながら北秀号に関する報告としたい。

半年近く北秀に騎乗してようやく、北秀という馬がわかってきたように思う。もう八才になったせいか数年前のようなやんちゃなところは少なくなってきた。しかしまだ　わがままな点が目につく、練習中も、引き馬時も。それ故によけい馬上で馬とけんかしないようにしなければならない。懲戒はすかさずビシッとやるべきで、だらだらと続けてはならない。今までこういうことに気付かず、馬に恐怖心のみをうえつけてしまったようである。何よりも騎手が冷静になるべきであろう。冬期間騎手の未熟な為のあせりから、馬場内での運動が多く馴致をおこたりがちだった。一週間馴致を怠たると馬は以前の状態に帰ってしまうといわれる。二月末外乗に行き馴致不足を痛感、これからは外乗、索き馬をできるだけ多くやり、濠や水たまりなどあらゆるものを見せ、そしてまたがすようにせねばならない。

一方馬場内においては、何としても基本的な運動を忠実にあせらずにやるよう心がける。前進、停止、後退、回転、施回の5つの運動、それに各歩様における歩度の変化を確実に徹底させることであろう。又一週間に一回位の割で経路をまわってみる、それによって、いわゆる場慣れすることも必要であろう。

北秀は我北大馬術部の次代を担っていく馬であると信ずる。一年間、我学生生活のすべてを〃デコ〃にかけてみたい、現在の心境である。

ことぶき食堂

北17西5　TEL 741—1578

同好会より

片寄　馨

昨秋　馬場、厩舎等の移転が無事終了し、新しい設備のもとでを競うことは非常に喜ばしく思っております。

大学本部、学生部をはじめ関係されました皆様方には、甚だ失礼ではありますが、部報紙上にて厚く御礼申し上げます。

春とともに同窓会も活発な活動を期しておりますが、それぞれ勤務の関係上部員同様の活動はかなり難しいものと思われます。昨年来、学内、諸先輩を中心に全員の獲得と力を注ぎ約三十名の会員をもつに至りました。今後は定期練習を中心に現役部員との交歓試合、各競技会への参加を考えております。

同好会も人材の豊富さを考えれば、イタリア式（？）できたえられ現役部員との障害飛越競技ででも、一日の長は争えないところでありましょう。

また、今年度は七月に北大馬場で全道自馬大会、八月に帯畜大馬場で道大兼、国体予選が催されます。各競技会への会員の参加が可能なように思われますので、同好会の活躍を期待しております。

最後に、長年来、馬術部長、同好会々長として公私にわたり御指導御便達を仰いだ半沢道郎先生も来春をもちまして、御退官のはこびになりました。

先生には、筆舌に尽しがたい御尽力を賜わりましたことを厚く感謝致しております。

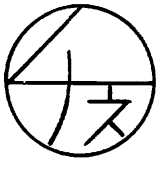
また、先生の騎乗振りからはまだまだ学ぶべきことが残っております。馬場に確実に馬上の勇姿を仰ぎたく念じております。

（文責　片寄）

昭和46年度会計報告

47. 3. 31　現在

収入		支出	
年間会費	14,000	日馬連加盟金	3,000
騎乗費	1,850	道馬連加盟金	3,000
		印鑑・会員券	1,970
		案内状等印刷代	1,300
		郵送費	2,087
		雑費（薬品）	330
計	15,850		11,687



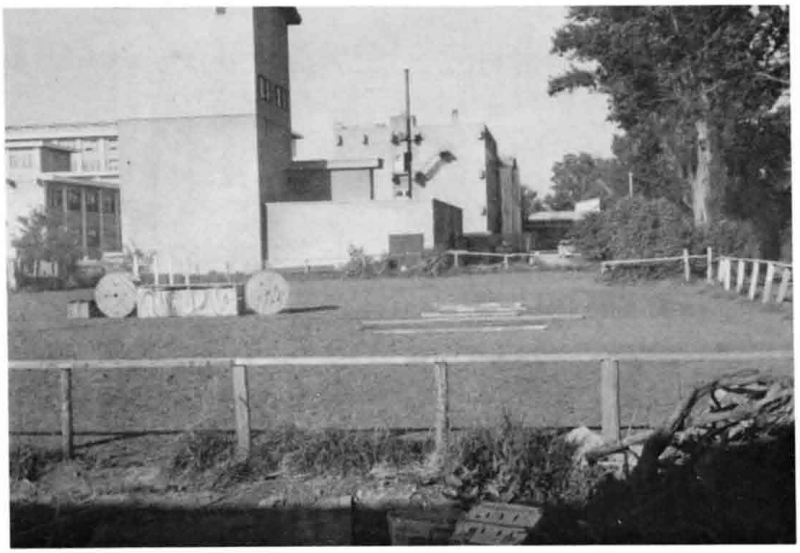
喫茶・スナック

チェス

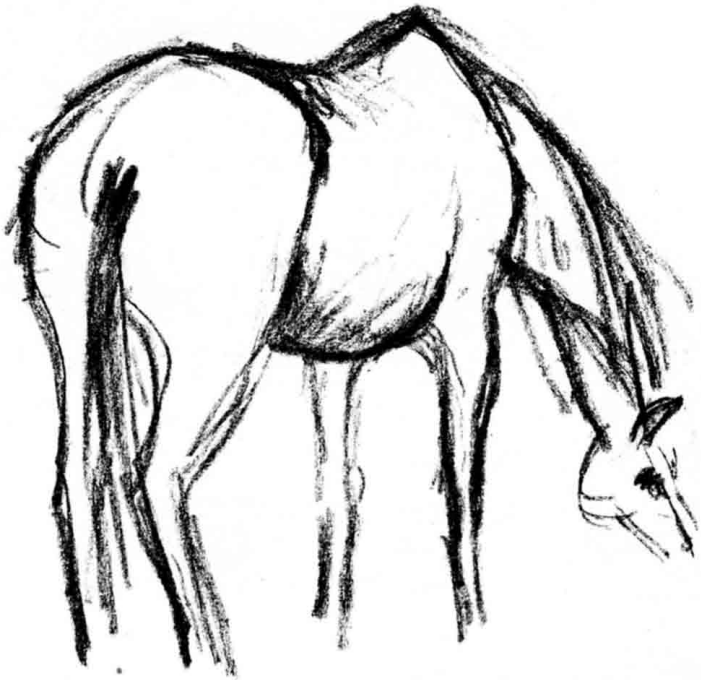
N13W4 仲通り

711−2277

新厩舎紹介



思い出多い古き馬場
跡地には原子力関係の建物ができるそうな。



'71.10.13
ネル

クラブ紹介

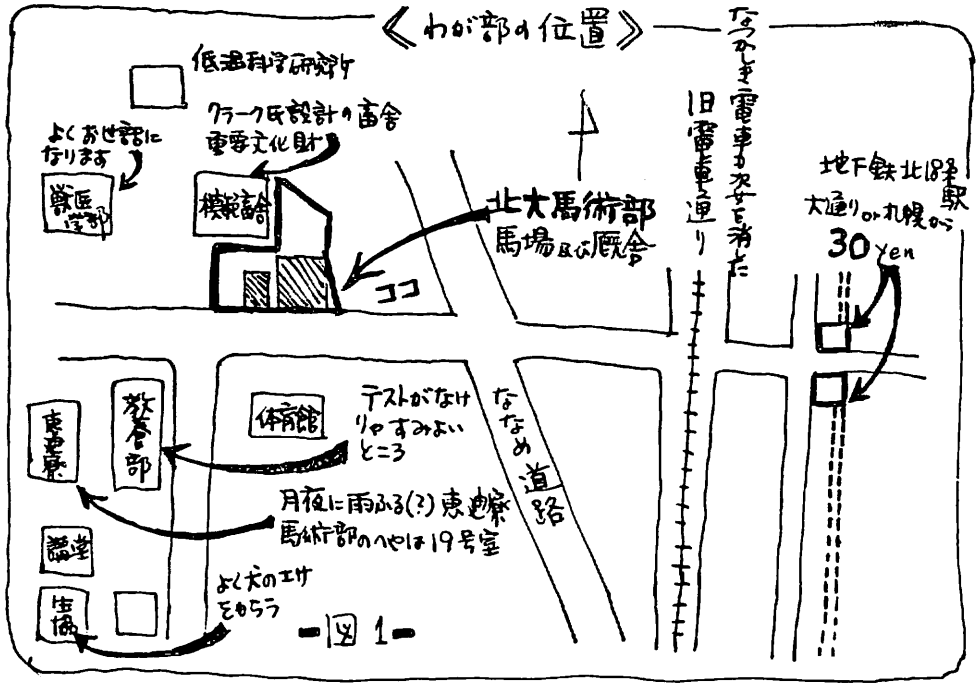
わが北大馬術部は懐しのポプラ並木に別れを告げました。新しい厩舎と馬場とは教養部の北にあります。

オリンピックでその風貌を新たにしたサッポロのもと、北大馬術部もまた装いを新たにしたのであります。それを支える心の古さ、新しさ……その是非はともかく、まあ、以下ごらんください。

図示してみました。図1～5とあります。略図ですが、順をおって見ていって下さい。

図1……全体の位置
図2……主に馬場側から
図3……主に厩舎側から
図4……男子部室、女子部室（階下）
図5……（階上）

（K.S記）



—図1—

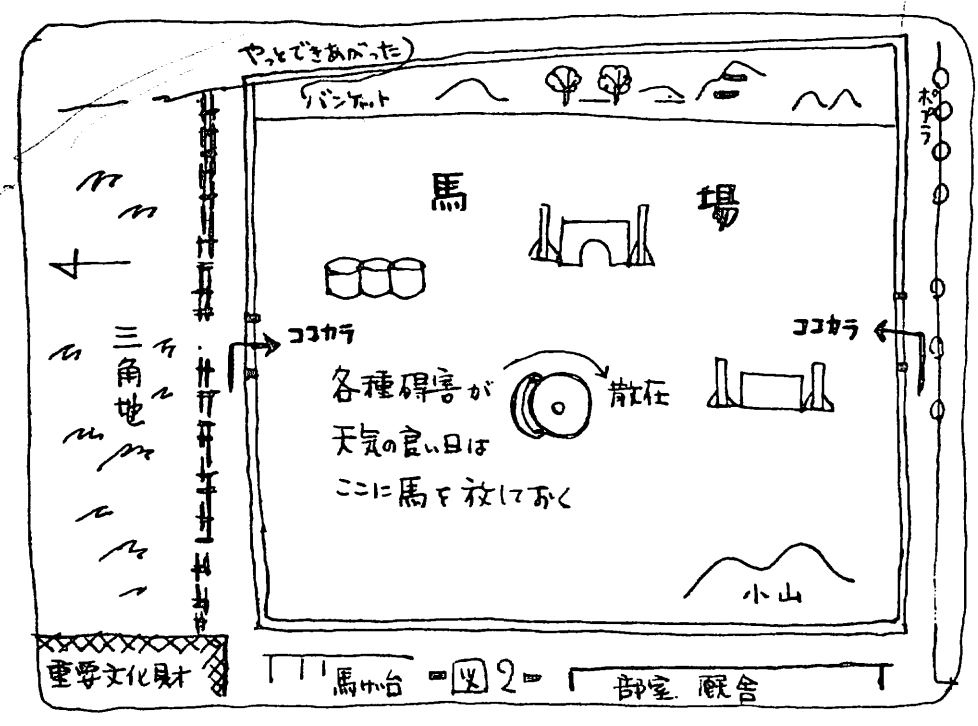

やっとできあがった
バンケット
馬
場
ココカラ
ココカラ
三角地
各種障害が
天気の良い日は
ここに馬を放しておく
散在
小山
重要文化財
馬けい台
部室 厩舎

図2

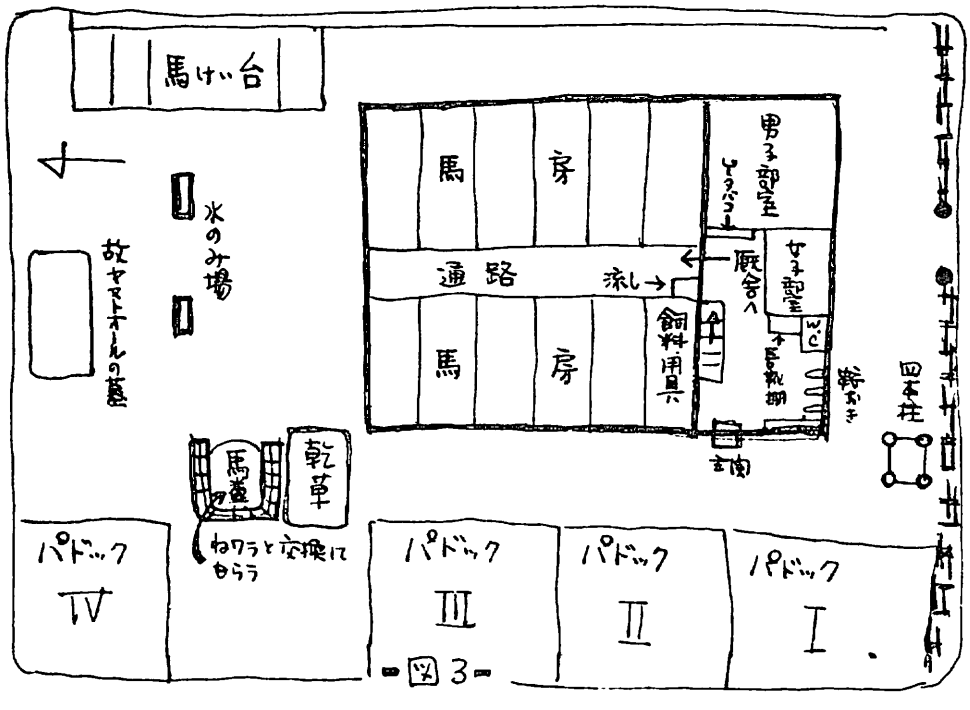
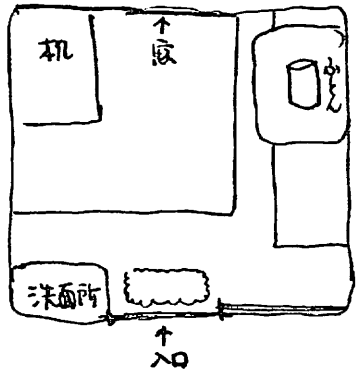
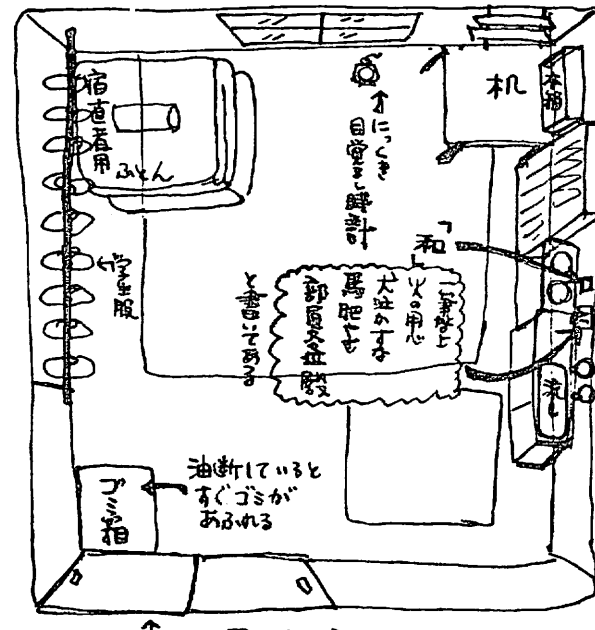

馬けい台
水のみ場
故ヤマトオールの墓
馬房
通路
流し
厩舎へ
男子部室
女子部室
W.C
長靴棚
飼料用具
玄関
鞍おき
四本柱
馬糞
乾草
ねワラと交換してもらう
パドック IV
パドック III
パドック II
パドック I

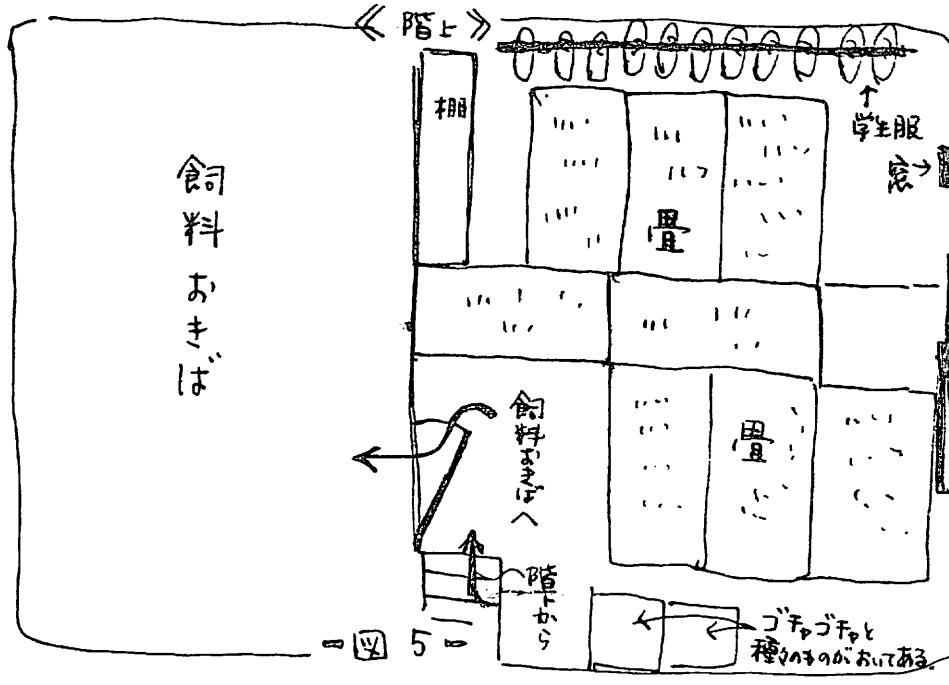
図3


机
窓
ふとん
洗面所
入口

女子部室


宿直看用ふとん
にっこり目覚まし時計
机
本棚
「和」
一筆啓上
火の用心
犬注意する
馬肥ゆる
部屋を盗まれると書いてある
学生服
ゴミ箱
油断しているとすぐゴミがあふれる
入口

男子部室


《階上》
飼料おきば
棚
畳
畳
学生服
窓
飼料おきばへ
階下から
ゴチャゴチャと種々のものがおいてある

—図 5—

卒業生の素顔

堀村哲世

千里馬の調教者、まるでチョンが我が子のようにかわいくてしかたがないらしいのです。おかげでチョンの馬房はきれいなことが多かったのです。若くてはつらつとしたチョンは連れて歩くととびはねるのでヒヤヒヤもの。ある日の部会で兄は練習時馬けい台から乗っていくことを提案しました。練習時間を有効に使うためです。しかしその後「チョンのひき馬こわくてなあ」と笑って本音を吐いていましたね。やさしい人です。兄貴のような感じ。笑うときはさも愉快そうに笑います。そして意外と金持ちです。器用な人で旭川の道大へ行った時の盆おどりではあざやかな手つき、腰つきをみせました。しかし念願の社交ダンスの方はいまだ上達せず。ある人に「大学に行っててダンスもおどれないんですか」と言われたといって口惜しき様子です。コンパの時は妙に黙っている人でした。さりとて離れてるわけではなし。独特のムードがあるのです。でもそばに寄って話してみると案外ペラペラとしゃべりだすのです。「僕は君の太陽です」の話はだいぶ有名になりました。四年目で皆の羨望を受けながらただ一人卒業して東京へ就職なさるそうです。札幌をとおざかっても部からはとおざかりませんように。

桝井　明

驟、晨、雪嶺につぎつぎと「お手」を教えていった人。雪嶺が日高に帰ってしまってからは「丹下左膳」と北勇号をかわいがっています。馬房の中にもいつも気を配っているので勇のベッドはいつもふかふかしています。当番が「勇んとこは少しでいいだろう」と寝ワラをケチッたりすると「アホウ、もっと入れんかぁ」と何束もかかえていきます。よく笑いにぎやかな人です。兄がいると部屋の中がいっぺんに明るくなります。テレビが好き、山下一美さんが好き。オリンピックの女子フイギアはものすごく熱心に見ていました。この人も持説をまげることの少ない人です。桝井さんと今井さんが議論などはじめると、聞いている方はハラハラします。

四頭の侍
左から桝井兄、梶村兄、
大見兄、北凛号の煩を
撫でるは今井兄。

愛馬、北勇号にまたがる
は桝井兄

梶村兄の飛越をじっと
見守る大見兄

旧馬場、それぞれに思い出多い事でしょう。

今井兄の見事な飛越フォーム

今井敏郎

びったり息のあっていた北武号がいなくなってちょっとの間はおちつかぬ様子でしたが、今は又北凛号にまたがり、気のあったところをみせています。キリリとした美青年もネルソンの顔を見るととたんに顔のネジがゆるむのです。スケッチ帖を片手に「こら動くな、動くな」などと言いながらネルをスケッチしている今井さんを想像するとこちらまでニヤッと笑ってしまうのです。腹でせんたくができそうなほどやせていたネルは駆虫薬服用の結果、虫をボロボロ出し、「これで確実に二十kgは肥るな」と彼を喜ばせています。がんこです。議論をしていると最初から最後まで意見がかわっていないのに驚かされます。しかしそのがんこさには筋がとおっています。

大見太一

デコとそっくりな容ぼうで馬が人に似るのか、人が馬に似るのかと下級生を困惑させた人。デコの手入れを実に丁寧にやっていました。そして「だいたいうちの馬は手入れの時間が短かすぎるんだ。どの馬だって本当はきれいなんだよ。」と口をとんがらせて言っていました。青草の多い頃にはデコとともに野に遊ぶ。（おかげでデコはこの夏もスマートになれませんでした。）そして下級生にしまらない顔でこう言うのです。「な、他の馬にもいっぱい青草食わせに行ってくれな。オレが行ってもいいけど、他の馬を連れて行くとこいつが怒るんだよ」ところが役員交代コンバ以来、ばったりと乗りにいらっしゃいません。どうしたのでしょう。持病の〇が悪化したのかな？

デコがすねていますよ。「下手の横好き」の典型のようなバチンコ好き。（いやいや「好きこそものの上手なれ」ってのもある。）コンバのとき歌う十八番の〇〇〇の歌とものすごく食べることでも有名でした。家業は九州小倉のバケツ屋さん。あとをつぐそうです。

神様の巻

田崎　拓昭

剛柔がみごと調和を保っている人物。

（剛の面）ちょっと意固地に思える程考えを変えないことがある。みんなでいろいろ説得してもつうじない。自分の信念に自信を持っているのであろう。常に男らしく生きようとしているように見える。薩摩男の誇りかも知れない。

（柔の面）人が良すぎて親切すぎてやたら多忙のようである。そのへんが部員に慕われるゆえんであろう。

あまり用も無いのになんだかテレビをつけたがる。音が無いとさびしいのかも知れない。ある女の人から好意をよせられたのにその気になれず、まとまらなかったという、うそのようなほんとの話がある。浪人時代を経たり留年したりと、とかく紆余曲折する部員が多い中で無事にノーダブリーで世を渡ってきた人。要領がいいというのでは無く、とにかく非常な努力家であるということだろう。なにかと苦労の多い馬術部をしょって立っている。

近森　憲助

黒潮の香りの中で育った土佐男児。のびのびとした美声で有名だがこのごろあまり聞かせてくれない。長い間馬に乗るのをやめていたが近頃また乗りはじめた。あの巨体で、千里馬などに乗ると思わず同情してしまう。（もちろん馬の方に）もの知りだし、なかなか冷静でもある。ととのった読みやすい字を書く。会計監査などをちゃんとやりだしたのも馬術部としては異例のことではなかろうか。と書くとさぞかしきちんとした人だろうと思いそうだが、ところが彼の下宿の部屋はものすごいそうである。「千円払うからかたづけに来てくれない？」と女子部員に頼んでいたが「一日で終われればいいけど」とムゲにことわられていた。最近念願のゆりいすとパイプを買ったそうである。ゆりいすにゆられパイプの煙をくゆらせる彼。これでベレー帽でもかぶると満点なのだが。

西村正二郎

ほんとうに気のやさしい人。人間にも馬にも「情」でせまりついには心をほぐしてしまう不思議な才能を持っている。夕闇の中で北晨にキスをされたとかいう話もある。めがねをとるとうるんだ瞳が印象的。その瞳には栗原小巻さんしかうつらない。彼の部屋には何十枚もの小巻さんの写真が貼られている。小

巻さんだらけの部屋の中でボーッとしているらしい。目をとじて歌う「初恋」は舟木一夫よりずっとうまいという説がある。しかし大変な照れやなのでこれを歌わすにはだいぶ酔わさねばならない。又この人もパチンコ好き。いつもスッカラカンになっては「あ〜あすさんじょるなあ」と実に晴々とした顔で帰ってくる。しかし親指渡世に命をかけて愛車キャデラック（？）でさっそうと今日も行くのである。

横山　豊昭

みかけはどうあろうと本当は良家のぼっちゃんなのだそうだ。注意して見ているとなる程もの静かな人である。眼鏡の奥深くで光る瞳は一種異様な雰囲気をかもし出す。部室で黙々と何事かをしているところは「闇の中の魑魅魍魎」という感じ。作業ではアルバイトの割り振り、馬場内では冷静な馬の御し方などたんたんとした行動には見習うべきものがある。夏の草刈りの際の車の運転は荷台に乗っている大勢の部員に少なからず身の危険を感じさせた。クラブ外の行動も活発らしくたびたび恋愛などをされているそうである。将来「きれいな奥さんをもらって毎日とりかえるんだ」と本気ともとれる冗談を言って女子部員を恐怖におとしいれたという話もある。

南部　孝一

昨年数学でドッペってしまった。曰く「オレ、数学とオンナだけは苦手でなあ。」数学ができないのは納得できるとしても、どうしてあの顔でもてないのかなあ。不思議だなあ。（シラケタ）部員からは公然と〃土方〃呼ばわりされている。なるほどつくづくと顔を眺めればそれも無理はないと思われる。（イカるな南部氏、たくましいという意味ナノダ。）作業でツルハシを振っている姿が一番サマになっており、たまにこれから講義へ出るんだなんていうときのサッパリした格好がなんかそぐわない男。最近ニタニタデレーッとしているようですが数学、頑張って下さいよ。

則近　彰

コンパで唄う数々の寮歌はさすがに二年間恵廸で過しただけあって迫力がある。しかし同時にコンパでは、必ずといっていいほど〃東京音頭〃を身振りよろしくいつもはキリリと軽く結んだ口元をデレッとさせて熱演する。そのくせ本当の〃東京音頭〃の歌詞は知らないのである。昨年の部報に「何やら軟弱になってきた。」と書かれていたが、今年もやはりそう書かさるを得ないようである。曰く「あしにゃあなあ、岡山へ帰りゃあ、ちゃんとおるんじゃがぁ。この前帰ったときにゃあ旭川に二人でボートを浮か

べてのう……。」と言いつつ相好を崩しデレデレ。
嗚呼！〝硬派ノリチカ〟の看板遂に墜つ!!　一本筋の通ったいい男である。

人間の巻

相川　宗厳

ふうてんもよけてとおる（？）恵廸寮生である。その威厳のある名前と、重量感のある声は人生の重みを感じさせる。「名は体を表わす」の言葉どおり相貌も実にいかめしい。足が地についている感じでやるべきことはきちんとやる。物事を沈着冷静に処理していく能力がありそう。しかし笑うととたんに相好がくずれ無邪気な顔になる。日高合宿の際落馬して鉄条網にひっかかりズタズタになった事も特筆すべきであろう。とかくケガの多い御人。ある時人さし指の先端を馬に踏まれ「爪、生えてくるだろうか」と情けない声を出していた。寮歌をこよなく愛する。水産放浪歌の前口上は眼をとじてうなるのがここちよいそうである。寮歌だけでなく春歌もよくうたう。

宇野　浩三

大阪出身の猛者。日高合宿の際の穴堀りは一番サマになっていた。高校時代はサッカー部でキーパーをやっていたそうで、その強い脚力でグイグイ馬を推進させる。くっと結んだくちもとはとっつきにくい感じを与える。しかしよく見ると眼鏡の奥にはやさしい目が光っている。北瑛を愛し詩を愛し歌を口ずさむロマンチストでもあるのだ。固いようで柔かく柔かいようで固く冷たいようで熱く熱いようで冷たい。「鉄の快さ」であろうか。

江口　州志

わるびれず無邪気な九州男児である。よくしゃべる男である。しかし会話における表現力は小学生並みか、子供っぽい比喩が多い。疲れた時などは変な事を口走り出す。この前も話の最中に「グンカンマダム」「グンカンマダム」と言うので何を言っているのかと思ったら本人は「有閑マダム」と言っているつもりらしかった。人が良くて頼まれるとイヤとは言えぬ性分らしい。ときどき「つぼや」のお菓子などもごちそうしてくれる。親しみやすく誰からも好かれるタイプである。いろいろな面も見せるが要するに素直でまじめな人である。人を呼ぶとき「○○氏」と言う。これは冗談で言っているのかと長い間思っていたら、くせらしい。部員の中ではめずらしく勉強熱心で、図学の本などをかかえてやって来て、「いやぁ今日はドイッ語やらなくっちゃ」なんて悪友のさそいをことわっている。

小田　恭治　　大分県立日田高校

二年目後期に入部した何だか不思議な少年。コンパの時などの彼の調子はずれの歌には驚かされる。何か言われると時々「なして、どうして、おせぇて。」と言う。くせなのか。部室にテレビを置いてくれた男である。

景山　博文

彼のにこやかなほほえみは知らぬまに人をひきこんでしまう。他の人が言うとかどがたつところでも彼が言うと丸くおさまる不思議な人である。そしてたまにとひ出すくだらないシャレは周囲を沈黙させる力がある。浪人して北海道へ来たという。（しかしその割にはぐっとあどけなく見える）いろんなバイトをして社会勉強をしてきたようでその苦労を少々でっぱった腹部が物語っている。彼のただ一つの欠点はものぐさなことである。つい「めんどうくさい」と口に出るようである。誰かお嫁さんを世話してあげてください。

佐伯久美子

馬術部の紅一点になってしまった。男ばかりでとかく殺風景になりがちな部屋の中に気を配り色どりをそえる。流しの中にたまった食器類を洗ったり洗たくをしたり、又部員にお茶を入れたりとその内部における役割りは非常に大きなものである。「うぶ」な子だと思っていたら、案外酒が強かったり、つうじるはずのない冗談がつうじたりしてギョッとさせる。せのびしたい年頃だろうか。瀬戸内育ちで、のどかな気候の影響か、時々ボケーッとしていることがある。瀬戸内海が年々汚されていくといって悲しんでいる。なぜかよく食べ物を持っている。そしてクロやシロにやった残りを人間様にごちそうしてくれる。人間よりも犬と話が合うようである。

柴田　好

彼の名は生まれる前からつけられていたそうだ。（女の子が生まれることを予想して）本名はめったにあかさない。秘密にしておきたいようだから知っている人も知らぬふりをしていた方が賢明である。一年目の中ではただ一人の「どさん子」である。現役であろうと思っていたら実は〇才だった。何か大

きなクラブの行事のあるごとに一年目とは思えぬ手腕を発揮した。それをみこまれて現在体育会の方の係をやっている。将来体育会をのっとるそうである。アルバイか本職かわからぬようなバイトの口をもっていて、学校よりもそっちの方が楽しそうに見える。そのせいか交際範囲が広くしっかりした現実感覚を身につけている。例にもれず動物好き。クロとシロの食事が不規則なのをみかねて生協食堂の残飯をもらうことを交渉したのもこの人である。

花谷　馨

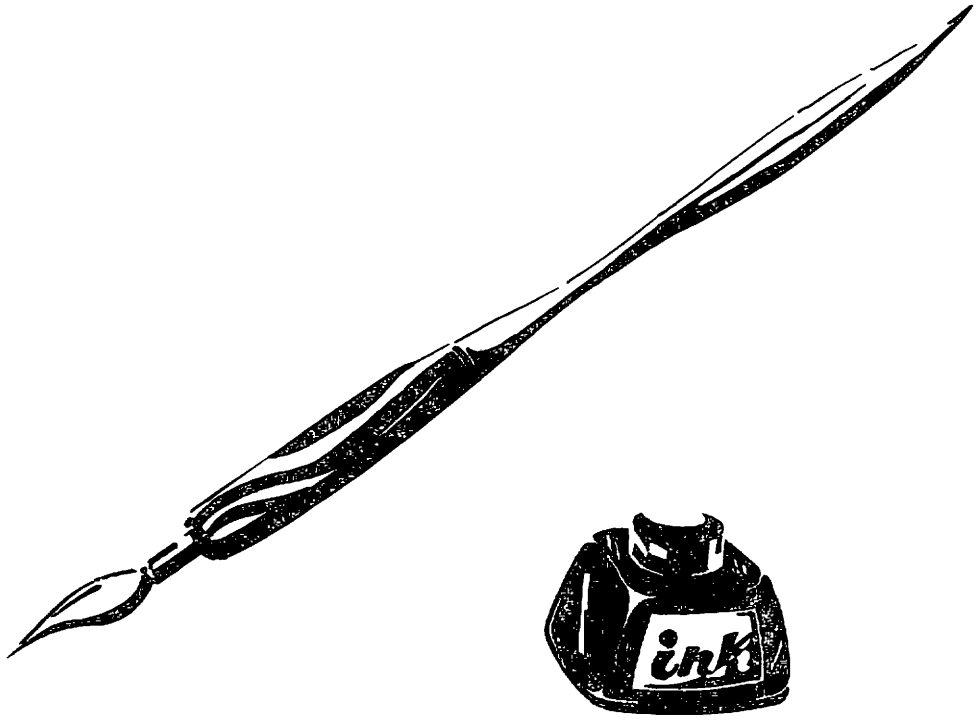
京都から来た情緒豊かな男。色白で軟弱ムードをただよわせている。自称「京のぼん」である。そういえばどこかおっとりしていて育ちのよさを見せることもある。口は相当悪いので言いにくいことをよく言っているがふしぎに憎めぬ男である。「京都大原三千院恋につかれた女が一人～」という歌がある。この「つかれた」は「疲れた」か「憑かれた」かどちらかと尋ねたら、後者だと言った。京都人の細やかな情を持つ彼には「疲れる」などという表現は認知し得ないのであろう。

一年目のうちで最初に入部した。今年の初詣で馬術にはげむことを誓ったそうでその成果もあがりつつあるようである。今はなきヤマトールをかわいがっていた。

吉野　勝之

つきあえばつきあうほどわかる気のよさ。やさしい人である。人に頼まれるとイヤとはいえぬ面をもつ。好きなことのためなら労力を惜しまない。それで何かしらゴチャゴチャつくるのが好きな様子。彼の乗馬ズボンも手製だそうである。器用なのであろう。犬とかわいい女の子も好きらしい。しょっちゅうテレビに登場するスターを見ては「かわいいなぁ」と言っている。ちょっとかたやぶりな変なところがあってみんなから「おもろい吉野」と言われている。オリンピックのバイトに行ってたくさんの戦利品をもちかえった功労者。ハチマキ愛好者でもある。

創　作　集



わが愛しの君

梶村哲世

彼女の名は千里馬、明けて5才になる。わが愛するチョンも、そろそろ女らしさを増して来るころだ。145cmぐらいしかないチビちゃんだが、足腰は、しっかりしているし、胴もまるまると、まとまっている。もう少し肩の筋肉がつけば、いい線いくのだろうが。彼女とのつき合いは、昨年の一月から始まる。初めのうちは、あまり思いきった行動を取ることはできなかった。七月頃までは もっぱら朝もやの中を、ポプラ並木へ彼女と共に散歩に出かけたものだ。このうちに、我々の間には親近感がわいて来たし、僕の手綱さばきよろしく、無理を言うことも少なくなった。八月に入ってからも相変わらず彼女との散歩はつづいた。馬場では少し速歩の練習をすることにしました。馬場の砂の上に置いた棒きれをまたいだり、円を描いたり、たまには止ってみたり、仲々楽しい時間であった。彼女とのデートも二時間でおわるが、終りの三十分ぐらいは、又外に出かけることにした。散歩は実にいい、外へ出ると、時々急に立止って首をのばし、周囲を見回わす。我々の散歩をだれかに見られるのをおそれているのか？　そんな時、僕は彼女に言ってやる。「だれに見られたっていいじゃないか、しばらくすれば、馴れてくるよ」。「だって、いやだもん」。彼女のしぶること、しきりである。しかし、ここであまやかしては、後々、尻にしかれてしまいそうである。僕は、心を鬼にして、無理やり引っぱってゆく。こんなことを何度もくり返すのであるが、彼女もだんだん馴れてきて、ぐずる事もなくなる。女性というのは、ずうずうしいというのか、あつかましいというか、すぐにマンネリ化してしまうらしい。外に出る時は、ゆっくり歩くことにしている。走ったりすると、すぐ頭にきて、僕の止めるのもきかず、走り続ける。こんなことも、馴れれば、何ということもないのだが。

夏も終りに近づき、九月に入ると、棒きれを50cmぐらいに上げて、飛んでみた。何しろ二人で一緒にまたぐのだから、彼女にとっては、迷惑千万な話であるらしい。「こんなもの一人で、またがせてくれればいいのに」と、いいたげである。しかし僕は、彼女と一緒に飛びたいのである。そこで、飛んでくれた後には、濃厚な、愛撫をしてやる事にした。すると現金なもので、今度、棒きれに向って歩くと、愛撫がほしいのかどうか、いやがらずに、僕と一緒に飛んでくれるようになった。

十月に入ると、高さを90mぐらいにし、平行やダブルも、組合わせて、飛ぶことにした。うまく飛べなかった時、彼女は苦痛の色をかくさない。そっぽを向き、とび上り、肘てつをくわそうとする。こんな時は、特に濃厚な愛撫をして、なぐさめることにしている。このごろは、外へ出ても、あまりはずかしがることはなくなったので、溝をまたいでみたり、草や木の繁った所にまで、足をのばしてみる。しかし彼女は心配そうである。「溝をまたぐなんて、はしたない。私は、そんなにおてんば娘では、ありませんことよ」、「こんなに、草の、おい繁った所で、彼は何をしようと思っているのかしら、全く知れたものじゃない、あゝいやだいやだ」。

初めの頃、かけっこをしようと言っても、彼女は、なかなか同

意してくれなかった。飛んだり、はねたりして、いやがるのだ。こんな時に、腹を立てても仕方がないので、僕の気持が、わかってくれるまで、気長に、さそって見る、すると、まんざら僕のことがきらいではなさそうで、段々同意するようになって来た。そこで、すかさず愛撫をしてやると、彼女の喜ぶことしきりである。彼女は、完全に、僕に参っているようである。

高い棒きれを、飛んだり、巾のある物を、飛んだりするとき、向っていってくれるのは、うれしいのだが、自分かってに、行くようになった。一緒に飛んでくれるのは、うれしいが、僕の思うように、走ってくれるのでなければ、やはりおもしろくない。若い彼女は、ただ、がむしゃらに飛ぶだけで、棒きれを、引っかけたり、落したりしたのでは、危なくてしょうがない。そこで、年上の僕としては、彼女に、二人で飛ぶ時の、要領を、教えこまなくてはならなくなった。しかし彼女も、よく僕の言うことを、聞いてくれたし、安心して飛べるようになるまで、それほどの時間はかからなかった。

彼女との出合いから約一年、いろいろなことがあったが、一日二時間のデイトは、楽しい思い出ばかりを、残した。彼女も、そろそろ大人になって来たし、僕の出る幕は、なくなってきたようだ。しかしこれから、彼女の相手を、つとめる人は、困難な事が、山と出てくるだろうと思う。今まで、子供だからといって、甘やかしてきたけれど、これからは、太人の教育が必要となってきた。まだまだ、彼女に未練が残るが、札幌を出てゆかなければならず、彼女に、ついて来いと行っても、彼女には無理なことである。小さい体で、僕と一緒に、一生懸命飛んでくれた時の、あの爽快さ。

そして、ポプラ並木での散歩。ぐずをこねる時の、彼女の顔。愛撫してやった時のうれしそうな瞳。苦痛を、全体で表わす彼女。ひとつひとつのしぐさが、何とも愛らしかった。今年の夏の大会には、ぜひやって来て、彼女の飛越ぶりを見たいものだ。ただ彼女が、他の人と一緒に飛んでいるのには、わずかな、ねたみも感ずるだろうが、チョンよ、その時まで、さようなら。

北大馬術方式の確立に向けて

昭和四十六年度卒業生　桝井　明

我々がイタリー馬術方式を始めてから既に四年が過ぎた。未知なる大海に帆をあげて以来、五年目の春を迎えんとしているわけである。この四年間のうちに目にみえる成果を何一つあげられなかったことを、我々は素直に認めざるを得まい。四年間という歳月は決して短かくはないが、今の我々にとっては、四年間は短かすぎた。この四年間、我々は常に戸惑い、混乱し、失敗を重ねてきた。そして恐らくこれからも、外から見た限りでのこの状況には変化がないかも知れない。だが諸兄、我々はこの自分達の失敗を通して、常に止揚させていくべきものは何なのかを自覚せねばならない。我々は自分達の努力不足を反省すると共に、同じ失敗をくり返して無駄な時間を費やしてはならない。

現状や如何に！

我々は恐らく他のどの学校馬術部よりも多く、イタリー式に関する書物を手にしているものと思われる。しかし、この事は今の我々に、さ程重要ではない。我々にとって今重大なことは、このテキストから、より多くの正確な知識を獲得すると共に、これを適確に実行することである。ここにおいて、我々が注意しなければならない事を述べたい。承知の様に我々がイタリー式を始めた四年前には、幸か不幸か既に立派な馬術テキストが先輩の努力で用意されていた。テキストは勿論書物であり、活字となって我々に語りかけてくるわけである。そこには先駆者達の苦心と情熱の結晶（エッセンス）だけが光っているのである。イタリー方式の創始者フェデリコ・カプリリーは多くの人馬転倒にもめげず、文字通り命がけで新方式の確立に努力したという。我々は血と汗とで創られたこのエッセンスを味わうことなく、大切にしまっておくだけで（テキストを最後まで読んだかどうかを言っているのではない。）自已満足していたのである。人が自分の考えていることを文章で表現するのは仲々大変なことである。意図する事の数パーセントしか伝わらないという事も、あながち有り得ないことではないだろう。一寸した言葉のとり違いが根本的な誤解を招かないとは誰も言いきれないのである。だからこそ安易に活字を追うことを努めて避けねばならない。理論と実際の間を埋めるものは何であるのか。理論的なことが正確に理解できるということは、我々の場合、とりも直さず毎日の練習において実際に納得のいく様なものでなくてはならないはずだ。（昨日聞いて今日できるということではない。）自分の得た知識を実際に適用してみて予想しうる反応（効果）がない時、そのままにしておいてはならないのである。予想に反したことの原因を反省すること、即ち自分が得た知識において誤解があったのかどうか、自分の技術が未熟であったからなのかどうか、を検討するのである。少なくともこうしたフィードバックをくり返すことなくしては何一つの向上も望めないことを忘れてはなるまい。我々は自分の手に入れた知識が血肉となっていなかった、にがい経験をもっている。考えてもみよう。我々の貧弱な理屈がどれ程有効なものとして実際に働いていたかを。

我々には新たな失敗や混乱を恐れてはなるまい。要は失敗を踏み

台にして何かを勝ちとり、そして前進することなのである。前進とは何か、決して外見上の成果だけではないはずだ。

諸兄、自分達の目標を再度確かめ、新たに目標に向かって前進せよ。ひたすらに努力せよ。我々は時流（日本の馬術界の方向性）に竿さしているのでは決してない。否むしろ我々は日本の馬術界の先駆として明日に向かっているのであるということを、諸兄は寸刻も忘れることがあってはならない。

馬術における一つの真理探究に一丸となって若き情熱を燃やし続ける諸兄の姿をみるとき、その中で一時でも共に過ごせることができた私は幸せであったと思う。諸兄、バトスの炎をどうか絶さないで欲しい。今、我々は北大馬術部四〇年の歴史の中に共に生き続けんとしている。諸兄によって受け継がれている貴重な灯は北大馬術部の伝統によって、しっかりと守られながら日本の馬術界の暗闇を照らし続けるであろう。

北大馬術方式が汗と涙の中から生まれ出てくる頃には私はもう居ないだろうが。だがしかし、私は信じて止まない。我々北大馬術部が日本馬術界の歴史の中に不滅の金字塔をうち建てる日の来ることを。

医　薬　品　御

ホシ伊藤株式会社

本　社　札幌市南8条西14丁目1397番地

支　店　帯広・釧路・北見・函館・旭川

滝川・室蘭・苫小牧・岩見沢

日はまた沈む

大山昇太（仮名）

もやしを馬鹿に盛り上げたラーメン・ライス。ゆうべ食ったそいつのおかげか、数日来の便秘が今朝で終った。健全な精神は健全な肉体に云云、ありゃホントらしい。なにせ昇太、昨日までは出したいものも出せぬもどかしさ、下腹部から湧き出るような抑圧感にすっかり心すさんでしまって、何をするにも気力が先ず失せ、数年前に故郷を捨てて、この地へ来たこと悔やまれてならぬ。漠とした夢も今は杏として望みなく、幼い昔の追憶だけが、さんざめく光の中でキラキラと輝く。小川のせせらぎ、若竹の葉擦れ。

しかし人間の精神構造なんちゅうもんは、あんがい単純なもの。一夜を隔てた今朝の爽快、晴れやかさはどうだ。たかだか糞づまりが解消されただけで、昇太身も世もなく夢と希望に満ち溢れ、世界が次第に明るんでくる。勢いにのりダルマの貯金箱をたたき割り、久方ぶりに街に出る。

陰鬱たる熱気が惨憺と籠る四畳半にふたぎ込んで、ついぞ忘れていたが、巷の風は五色にそよぎ街を上げてのオリンピック、オリンピック、オリンピックの氾濫。底抜けに明るい蒼空がまぶしい、娘達もあまりに晴やか綺麗すぎて、昇太には目の毒、気の毒。と、身につまされて吾が身ふりかえれば、これはあまりにみすぼらしい。片ちんばの長ぐつは穴があき、膝尻綻びたGパンからは、かすかにラクダのももひきがのぞく。加えて大通りには、肩とり腕くみ楽しそうに語ろう男女のなんと多いことか。闊達とした昇太の歩様、次第にせばまり気が滅入る。而してうなだれて思う。オイドンにもあんな日があった。故郷熊本での失恋が胸にいたい。

ほのかにけぶるような春の陽が、学校帰りの畔道に暖かだった。今日こそは、と勇気の限り奮い起こしうつむいて言った。「あの……僕っくと付き合ってくれませんか」。語尾のイントネーションが変に上ずって震えていた。暫しとまどいながら、消えも入りなむ風情で、「ええ……いいですよ」彼女は言ってくれた。そこかしこの蓮華畑、麦畑から舞い上がる雲雀のにぎにぎしさは、そのまま昇太の心もち。

しかし祭りの日が終るのに、長くはかからなかった。三日後には、不滅の金字塔として昇太の生涯に、燦然と輝いていたその日は、悪夢の一日、地獄の一日と化す。暮れなずむ校庭、西日に映えるすずかけの木のもと、彼女が見知らぬ男と語り合うのを見た。「……大山……」と言うのが聞きとれた。男は彼女をなじっているのか。彼女は屈託ない笑いをうかべながら言う。切れ否れに聞こえるその言葉が、聴覚を通して脳細胞につきささる。「だって……思いつめた顔で……断われないでしょう……」三日前の彼女の顔が、カット・バックで甦り、昇太の胸に、泉のようにも夏雲のように怒りが湧いて来、その見知らぬ男獰猛に睨み据えるが、これは無駄と知った。その男、主観的に見ても恐らくは客観的に見ても、斜に見てもすかして見ても昇太より遙かにイイ男。男は顔じゃない心ど、と吾が身励ましても、いたく傷ついた胸に何の益あろう。してみると今度は、男の純情踏みにじられた悲しみ胸に込み上げ、目頭熱くなる。山の端に入りかかる陽が、幾重にも幾重にも拡がる。血塗られた色。ボロボロになりたかった。

その日昇太の帰宅は遅かった。うつむいて、うなだれて、目からは涙を溢れさせて、弊衣をまとい、這うように歩いた。着飾った人達の前を、美しい女達の前を、きらびやかなショー・ウィンドウの前を、みすぼらしく這うように歩いた。我に帰ったのは、彼女に慕情を打ち明けたあの畔道。夜空一面の春の星が憎かった。

あの日昇太は誓った。二度と恋はすまじ、裏のハゲ山のてっぺんに聳える松の木のように雄々しく生きる。それもつかの間、同じ様に恋をして同じ様にうちひしがれて来た。そして今また、周囲と自分との疎外感まともに意識して、ひがみ半分悟り半分で思う。やっぱりオイドン、ニヒルにストイックに、ニル・アドミラリイにハード・ボイルドに生きようと。そう、硬派に生きよう。

義理と人情をはかりにかけりゃ。おのずと口ずさむメロディーに、彷彿としておもかげ浮かぶは花田秀次郎。　背なで吼えてる唐獅子牡丹。やがて自己陶酔に陥り、花田秀次郎はほとんど昇太にのり移る。世を憂い地を見つめ、肩少し落として一途に歩く。

何から何まで真暗闇よ、すじの通らぬことばかり。いつしか澄み渡った大空に雲流れ、日がかげるのも昇太にはふさわしい。

ハッと醒めたのは、何かに肩打ちつけてのけぞったから。見れば、髭むくじゃらの毛唐が傍らにつっ立って、横文字まくしたてる。しきりにカメラ指差して喋るからには、毛唐とぶっかった拍子に肩に掛けたカメラ、地に落ちたらしい。埒明かぬと見たか、もどかしいのか、横合いからつれと覚しき、一見醜くない中年の日本婦人口をはさむ「あなた、どこ見て歩いてるの」、顔に似合わず毒々しい。然しあんたらもどこ見て歩いてたんだ、と昇太不満顔。「デンバーからオリンピック見にいらしたのよ、この人。あなたの不注意で、日本のインプレッション台無しでしょう」、インプレッションの発音が妙に流麗。通訳らしいが、この女日本の国威一身に背負ったような、逆上した義務感責任感で昇太をのしる。「何を下向いて歩くことがあるの。胸をはって歩きなさい胸を、青年らしく。……それにメガネまでかけて」。是非はともかく、一々癪にさわる。何をこの婆あ、と思ったが、毛唐は不安そうにカメラを手に取り見つめている。何やら気が咎め、女への憤りはじっとこらえて「どうも、すみません」。すると彼は、何ごともなかった様にニコッと笑って頷いてくれた。にもかかわらず別れ際に、「ホントに気を付けなさいよ」と女の駄目押し。当の本人が笑ってるのに、なにもお前が念を押すことはなかろう。昇太の謙虚な自尊心に、むらむらと燃え立つ憎しみの炎。毛唐にまつわりついて歩み去る女の後姿に、バンバン、バンブ、淫婦、娼婦、横井さんを知らんのか、きけわだつみのこえ、と罵詈雑言の数々浴びせかける。いや、勿論心根がやさしいというか、いくじない昇太のこと、そう叫んだのは胸のうち、胸のうち。

それにしても、あの毛唐の鷹揚な態度、敵（？）ながらあっぱれ。あれだけの偉丈夫とも言うべき体軀もてば、ゆとりある態度も生まれるのか。体格の差は食生活の差、奴ら毛唐は肉を食い日本人は草を食う、この差異か。動物園のライオンはいつ見ても欠伸ばかり。泰然自若なその様子、どこか毛唐と似てないか。ライオンが哀れな野ウサギを時に赦す道理。するとオイドン哀れな野ウサギ。そもそもお茶漬やインスタントラーメン食うちょったんでは、たぎるような血と力、活気横溢したバイタリティーは湧いて来ん。強烈な意志とみなぎる熱情は、血のしたたるビフテキに、

ギラギラ輝く豚の脂肉に宿る。ここまで考えて昇太、食生活が個人の精神機能に及ぼす大いなる影響得心し、金の続く限り肉を食おう、今日から、今から肉を食う、と固く決意す。

肉屋に入って、驚いた。こんなに安いものか、肉とは。マトン特売百グラム三十四円の看板。昇太紛うことなくそれを指差し「おばさん、これ、これ、…マトン、マトン七百グラム」。昇太はマトンの何たるかを知らない。喜々として持ち帰った四畳半。包み開けば、肉は鮮やかな赤と白のコントラスト示し、いやが上にも昇太の食欲を誘う。取り急ぎ電気ポットに湯を沸かし、肉を投げ込む。茹で上ったところで醤油につけて食べる。美味かった。腹の減ってたせいもあろうが、美味かった。が、それも最初のうち、後半はいけない。羊の脂臭につき、肉片口にふくむだけでおぞましい嘔吐感が胸をつく。だが目の前にある食い物を残すなどとは、昇太の育って来た生活環境、食意地が赦さない。蒼き狼成吉思汗が、ヨーロッパの毛唐震え上がらせたのは、羊の肉を食うたからだ。昨日テレビで見た忍者は、密書を呑み込んだではないか。気力で食え、精神力で食え。

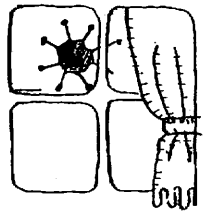
しかし腹も身のうち、血も通うし神経も通う。食えんものはどうにも食えん。苦しい闘争の末そう結論したとき、昇太は寂しかった、悲しかった、虚ろだった。食い物に対する執念、これはオイドンの唯一絶対の取り柄かも知れぬ。常日頃そう感じていた昇太に、この挫折は苦い。大山昇太という全存在が揺らぐような気がした。

だが昇太の失意とは関係なく、今日も一日が終ろうとしている。山も木も雪も、冷厳な暮色のなかに寡黙に鎮り、惟だ、風にちぎれた叢雲と、最後の一瞬を燃え盛る落陽だけが夢幻に朱い。やるせない思いが昇太をよぎる ―― 騎馬の民が駆けて、冬枯れの蒙古草原に沈む陽を追って、とおくとおく駆けて……凍てついたロシアの、針葉樹林のなかに、気のとおくなる厖大な年数のなかに、夕日は溶けた。

くるおしい　ばかりに
想ひ出が　よせてくる

入り陽がそめた　たなびく雲に
ともなはれて
夕靄　たたなづく
淡い山かげの　狭間から

たとえやうも　ない
さびしさと
むなしさと
消沈と



ヤマトールの挽歌

花谷　馨

はるか北海道の札幌まで来て
みんな僕をかわいがってくれたけど
厩舎はボロッちくて　寒さが骨身にしみたなあ
食事も前に比べたら粗末だったし
でもそんな事はどうでもいいんだ
ただちょっぴり岩坪さん達と別れたのが
寂しかっただけなんだ

こんな障碍で失敗するなんて　俺も落ちぶれたなあ
それにわざわざ首から落ちるなんて
そういえば　首がだんだん痛み出してきたぞ
なんのこれしき　俺は大障碍馬だぞ
幾度となく転倒したが　そのたびに起ち立がってきたんだ
もう少しこうして休んでいれば起きられますから
どうかみなさん　そう悲しそうな目で見つめないで下さい

でも今度は前と少し様子がちがうぞ
前足を動かそうと思っても　思うようにならないし
それにひどく寒気がする
入れかわりたちかわり　クラブの皆さんや
僕の知らない白衣を着た人達が
首の痛む所をなでたり押えつけたりしていく
そんなにみんなでなぶりものにしないでください
そのたびに僕は
痛さのために　涙が出ては恥ずかしいと思って
必死にこらえているのですから

少し眠くなってきたなあ
皆さん　ちょっとの間失礼して休ませて頂きます
眠ったら少しは楽になると思いますから
それじゃ皆さん　お休みなさい

ヤマは永い永い夢を見始めたのだ。二度と覚めることのない、楽しい夢を。夢の中で、彼は今失敗した障碍を、もう一度飛んみようと思い、五・六歩後ずさりすると、全力で走りだして思いきり踏み切った。

彼は急に、自分の体が軽くなってるのに気づいた。ふと下を見ると、今飛んだはずのあの障碍が、マッチ箱のように見える。人間はマッチ棒みたいだ。　彼には羽が生えていたのである。彼はそこで考えた。

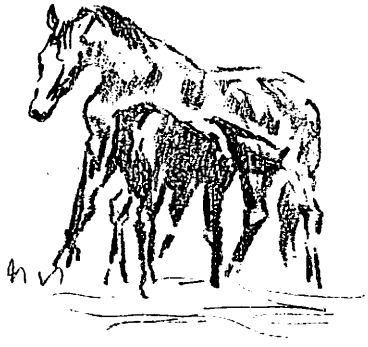
どこへ飛んで行こうか
日本の馬の故里、日高へ行こうか
それとも　ちょっと遠いが
岩坪さん達のいる大阪へ行ってみようかな

だけどちょっと待てよ
今僕が遠くに飛んで行ったら
クラブのみんなが心配するじゃないか
それにぼくも、もうすぐできる新厩舎を見てみたいし

そうだ、こうしょう
僕は新厩舎の横の空いた所で寝泊まりさせてもらって
そして皆さんの練習を、毎日見物させてもらおう
冬の、厳寒の北海道で
毎朝早く練習に励んでいる人と馬がいる事を
じっくりこの目で確かめてみよう
そしてそのつらさのために、途中でくじけそうな人がいたら
励ましてあげよう

そうだ
せっかく羽が生えて、どこへでも飛んでいけるのだから
これからの僕の生きがいは、もうこれで決まった
皆さん、それじゃ今晩は安心してゆっくり寝させて頂きます

お休みなさい　皆さん



厩舎に棲息する動物

江口洲志

我々のクラブには現在二匹の犬と八頭の馬と馬術部部員が雑居している。昨年、馬術部に入部して、それまでまったく知らなかった馬に関するいろいろな事を、徐々にではあるが、知るようになった。私自身、以前、犬を飼ったことがあるので、犬の生活などはよく知っていた。そこで馬の場合も、細かい点については相違はあろうけれども犬と同じ動物であるから犬とさほど変わりはしないであろうと思っていた。この考えが正しいかどうかは、私自身今もってよくわからないが、私の見た限りにおいて気のついたことがある。

犬は、元来、人間に対して従順であるといわれている。自分の飼主に対してはしっぽを振ってその従順さを表わす。そこで人間の方も、それがたまらなくかわいくなって、えさを与えるという具合だ。たとえ、その飼主が複数であっても、犬の行為はなんら変わることはない。しかしながら馬の場合はどうであろうか。我々部員は馬に夜・朝・昼・夕とえさを与え、ほぼ毎日馬と顔を合わせる。しかし馬は我々に対してかみついたり、はたまたは蹴ろうとまでする。馬をなでてやると、馬にかまれたということは何度もあるという具合だ。こんな時、たまらなく腹が立つ。そしてこんなにかわいがってやっているのにどうして？と思うことさえある。

私は時々、こんなことも考えてみる。我々部員がなにかの大会で障害を飛越する時、時々止まられることがある。その時、馬が自分の乗り手に対して従順さを示すならば、飛んでくれてもいいのにと。でも、これはあくまで自分の腕の未熟さをまったく無視したひどい考え方であるのだが。ただ馬が飛越する時、我々が馬に対して、馬がりっぱに飛んでくれるように、りっぱに扶助してやれるような技術をつけなければならぬことはいうまでもない。

このように言った所で、馬に従順さがないとか、人と馬との間に愛情がないとかいうのではない。先輩諸氏がある馬一頭をかわいがっているのをみるとなんとなくいいなあと思うし、馬の方も人に対して愛情を示していると思われる。これを見るにつけて、馬との生活を送れる我々は幸せだと思うし、これからも馬をかわいがりながら、技術をのばしていかなければならない。このように思う私の最近の気持ちである。

私のなかの童話ーさすらいのトムー

二年目　佐伯　久美子

トムは北風の中でふるえていました。初めは風に乗って旅をしていたのですが、あんまり風が強く吹くので疲れてしまって、木の小枝にこしかけて休むことにしたのです。トムがふるえていたのは風の冷たさのためではありませんでした。トムは友だちがほしかったのです。トムはこびとでした。ついこのあいだまで、こびとの国にいたのです。こびとの国は朝露の中にすうと浮かんで見えるほど近くにあるのですが、人間には見えません。こびとの国でトムはいつもひとりぼっちでした。トムはふしぎな力をもっていたから、こびとたちはこわがってちかよらなかったのです。トムは自分のまわりを自分の思うとおりに変えることができました。花を咲かせることも、鳥を歌わせることも・・・。だけどトムの心はいつもひえびえとして、冬でした。トムはいつも、朝露に浮かんでは消えていく人間たちをみつめていました。そして、とうとうたまらなくなって、とびだしてきたわけなのです。

トムは椎の木にこしかけて、その下をとおる人間たちをぼんやり見ていました。いろんな人がとおります。オーバーのえりをたてて足ばやに。ふと、トムの目がとまります。一人の男が歩いていました。男は貧しそうな身なりでした。そして、手にはあはあと息をふきかけていました。トムはびっくりして、それから、うれしくなりました。「あの人は、きっとあたたかい心を持っているにちがいない。それを少しずつはきだして手をあたためているんだ。」トムはぴょんと木をとびおりて、男の肩にちょこんとすわり、言いました。「こんにちは。君のうちに行っていい？友だちになりたいの。」「いいよ。」男はジョンといいました。

トムとジョンの生活がはじまりました。ジョンはぶっきらぼうでしたが、悪い人間ではありませんでした。トムは毎日、少しずつ、家の中を住みよく変えていきました。ジョンは初め驚き、そして、たいそう喜びました。ジョンのうれしそうな顔を見ると、トムもうれしくてたまらなくなるのでした。しあわせな毎日がすぎました。トムのふしぎな力がだんだんわかってくると、ジョンはトムにいろいろな頼みごとをするようになりました。トムは何のためだかわかりませんでしたが、ジョンの喜ぶ顔がみたくていっしょうけんめいやりました。ジョンはトムを使って、ちょっぴりお金をもうけたかったのです。それは別に悪いことではありません。人間の世界で生活するにはお金がいるのですから。だけどトムにはお金のちゃらちゃらという金属音が異様にきこえました。さわったときの冷たさも、トムをぞっとさせました。そして、それを平気でさわって勘定しているジョンを見ると、トムは寂しくなるのでした。

ある日、トムはジョンの肩にこしかけて朝食をたべていました。ジョンはミルクをカップに入れたところです。少し熱すぎたと思ったジョンは、ふうふう息をふきかけてさますとしました。トムはびっくりして、それから、悲しくなりました。トムは言いました。「君の心はつめたくなってしまったんだね。それを少しずつはきだして、ミルクをさましているんだ。」

「さよなら」と、ひとこと残して、トムは北風の中に出ていきました。ジョンはあっけにとられてぼかんとしていました。そして、トムは二度と帰ってこなかったのです。　（おしまい）

ひとり思うこと

宇野浩三

少しばかり気取った題を掲げはしたが、このごろは、どうもまとまった考えができないでいる。どれもこれも切々の想いー断想ばかりである。一度怠け癖がつくと、てきめん、思考力まで衰えるのではあろうか。まあもっとも、この傾向は、高三の頃以来ものである。

例えば人生、人生は一度だけである。（私は生まれ変わりなどという、くだらぬことは信じておらない。従って、私が生きておるのは今、であって、過去の時代に私は生きはしなかったであろうし、私の寿命以上の未来にも、私は生きぬであろう。）自分の思うように生きて、可なのではないだろうか。親は子に、自らの思惑通りの人生を送ってくれることを期待すべきではない。子は親よりも進歩しなくてはならぬであろう。いくらかの個体間において子が親よりも劣っておるとしても、それはそれで仕方のないことである。しかし、一つの世代がそれ全体として、前の世代に劣っているのであれば、その社会に進歩はない。やはり〃子〃は〃親〃よりも進んでいなければならない。自分よりも進んでいる者の為すことが理解できずに、その者を非難するということはよくあることである。

突き放したような言い方をすれば、〃子〃は生まれたくて生まれてきた訳ではないのである。従って、思うように生きることも可、なのである。

私が、いろんなことをやりたいと思い、そしてそれをするのは「生きるため」でなくて、「生きているから」である。しかし、こお考えが「生きるためにする」という考えに、必ずしも相反するものではないことを、私は知っている。「食べるために生きるのではなく、生きるために食べるのである」というのが単なる言葉の遊びにすぎぬことも、すでに明らかである。

自分を欠陥人間と思う心は、もはやどうにもならない。それを補償し得るものは、どこにもない。〃愛〃というのも、実にいい加減な言葉であって、これもあてになったものではない。心と技術の問題を混同して（かって、ただ似ている、というのでそれらを十把ひとからげにしてしまった者もいたが。）考えたりせぬ限り、それがどうにもならぬことであることは分る筈である。自分を欠陥人間と思う者は、真実は違っていたとしても、そう思っている、ということの故に、恐らくは一生、その心の重荷を自らの心に負い続けるのである。しかし、それを（完全にでは、勿論ないが）補償するものが、それ自身の内にあると考えることもできる。恐らくは、自分を欠陥人間と思う心もまた、不遜ではあろうから、謙譲即ち不遜であるように。

人を愛することができれば、それは素晴しいことだと思う。人に愛されるのは、心楽しいことに違いない。しかし、心をこめてすべてを忘却のかなたに押しやって、人を愛することのできるのは、素晴しいことだと思う。

とりとめのない文章は、とりとめなく終わるのが、やはり一番似合っているのでしょうか。

一九七二・二・一三記

一人旅の思い出

吉野　竜太郎

高校時代、よく一人でサイクリングに出かけた。道路地図を拡げると、心は早くも未知の世界へ飛んでいった。ここで一泊と、二日目はここ。ちょっとハード・スケジュールか。細そヒモを道路に合わせて長さを計る。等高線を見ておおよその行程を知る。

好んで一人で出かけた。放浪癖があるのだろう。少し遠出をする時には、母は出発間際に、薄茶色のお守りを持たせてくれた。神棚に向かって手を合わせ目を閉じてから。

小さくは、京都や奈良への日帰り。大きくは、琵琶湖一周、淡路島一周等々。高校2年の歳の暮え、若狭湾へ出かけたのが最大だ。

サイクリングをしている時の心地良さ。自分の魂が体から遊離してしまったように感じる、心地良い孤独感。手はハンドルを握り、足はペダルを踏んでいる。魂は、周囲の雑木林に或いは空に或いは山々に或いは海に溶けこんでいる。自分の体であって自分の体でないような。手足は自転車の一部品と化し、魂は自然界に遊ぶ。道が分れている。一方はアスファルト、他方はデコボコ道。自然とデコボコ道の上を走っていた。海がキラキラと輝いている。雲間から光の帯が垂れる。

山の奥の奥にお寺があった。長い石段を自転車を担いで登る。山門に立てかけ、さらに上に登る。山を背にして本堂が立っている。全くの静寂の中にある。時折、屋根の上からザザッーと滑り落ちる雪がその静寂に、ひび割れを作る。手を合わせて頭を下げた。廊下づたいに背の低いおじいさんが来たので、おみくじをもらった。『凶』と出た。なんとも言えない安心を感じた。それ以後、おみくじは引いた事がない。本堂の裏から登山道が続いていた。山を登ることにした。こんなに深い雪を経験した事がない。速くで、カァ――ン・・・・カァ――ン、と澄んだ音が響く。ザザー。竹を切っているようだ。どんどん登っていった。雪が深い。息が切れた。ジャンパーを脱いだ。荷物も全部途中で、ほっぽり出して頂上を目指した。雪がちらつき出した。恐ろしくなってきた。時々木々の隙間から下界が見える。山はじゅうたんのしわのように遠々と続き、その果ては雲がかかりボヤッーと霞む。道は山の間に見えたり隠れたりしながら続く。かなり高い所まで登っている。ガスで見通しがきかなくなって来た。恐しければ、恐ろしいほど足が早くなっているようだ。体がどんどんと頂上へ向かう。魂は遅れないようについて行く。雪はさらにひどく降り、霧もさらに深くなっていく。周囲の静寂を破るのはザクザクと言う足音と、ハアハアという呼吸だけである。恐怖感はさらに増す。死の恐怖？　否。　どんどん頂上を目指している。

頂上を示す立札があった。征服感・満足感が有った。

山を降りると又、自転車と共に、海岸べりの道路に自分は有った。

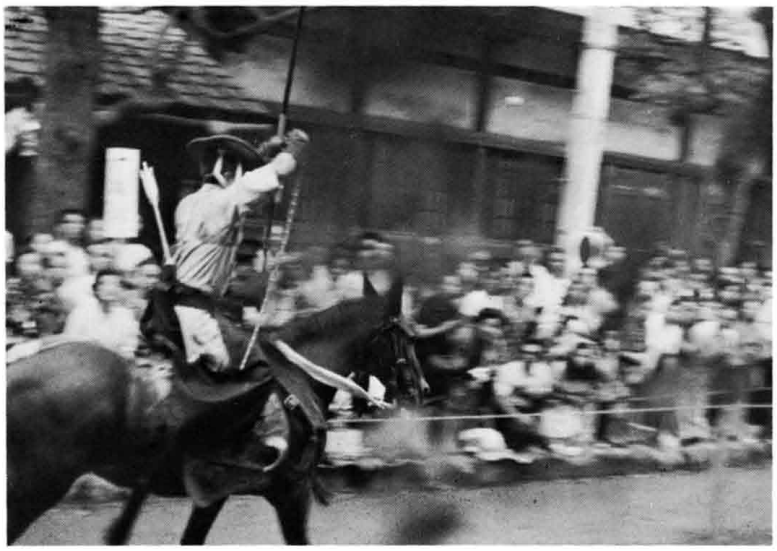
龍

先輩寄稿

昭和45年9月16日
八幡宮例大祭
「流鏑馬神事」
流鏑馬射手（三の射手）
馬場入り
後方赤い笠が
「平騎射」射手

（写真は荒木伸也氏より）

一の的へ当った瞬間



矢つがえを終わり
弓をうちおこしながら二の的へ向う

初めての弓馬

昭和三十九年度卒　荒木伸也

昭和四十五年の夏、一年間の仮の住いだった函館の借家をひきはらって、鎌倉市のアパートに引越したのは、流鏑馬（やぶさめ）をならう為だった。〃やぶさめ〃という言葉は少年の頃から知っていたが、実際を見たことはまだ一度もなかった。熊本の生家の近くに、木原山（きわらやま）という、和弓のような美しい形の山があったが、昔、京より流された鎮西八郎為朝がこの山に住み、上空を飛ぶ雁を強弓で射落したので、雁はこの山の上を迂回して飛ぶようになった、という伝説と共に〃雁回山（がんかいざん）〃とも呼ばれていた。この山懐にある古い神社で、毎年秋に流鏑馬が行なわれたので、大人たちの口から、「やぶさめ」「馬」「弓」という言葉を祭りの季節にしばしば耳にして、少年の心にこの三つのものが不思議な魅力となって印象づけられたのだった。北大で馬術部をやり、二年目の十月に函館の水産学部へ移行してからは、電車の窓からふと見つけた市営弓道場へ通って、弓道を習い始めたのも、今思うと、単なる偶然ではない事に気づくのである。

四十年の春大学を了へて家へ帰った時、木原山のその神社を訪ねてきいてみると、農家に馬がいなくなったので、一年前から流鏑馬は取止めにしているということだった。又、熊本市に流鏑馬に詳しい先生が居る、と或る人からきいたので、一度訪ねてみようと思っているうち、神奈川県の水産会社に就職が決り、新建造のトロール船（第二大米丸九千五百トン）の航海士として四十一年の十一月に日本を出航することになった。スエズ運河をぬける約四十日の航海の後、スペイン領サハラの沖、グランカナリヤ島ラスパルマスに着いた。この港を基地として北西アフリカ沿岸一帯の漁場でトロール漁業を行い、紋甲イカ、タコ、タイ、アジ、サバ等々の魚を獲った。一年につき約四十日間、有給の休暇をとるため飛行機で日本へ帰った時を除いて、その後四年間は毎日毎日海と魚の顔ばかり見る暮しが続いた。海と魚、これは平和そのものであるが、五十人の乗組員の織りなす人間的葛藤が時おり平和を乱し、単調な船内生活の適度な刺激になった。しかし、仕事にも慣れ、全ての乗組員の気心も知れてくると、やはり仕事の単調さが苦痛に感じられてきた。それと共に、三十才になろうとする今やらなければ、生涯機会を失ってしまうかもしれない流鏑馬に対するあこがれが、押え難く大きくなってきた。それで三回目の有給休暇に日本へ帰ると、すぐ会社を辞めた。一年前結婚後頂度十日目に別れて出発した新妻と、函館で二ケ月ばかり過した後、先ず単身上京して、小笠原流宗家「弓馬術礼法小笠原教場」の門をたたいて入門を許された。この時、騎射歴三十八年の教場の大先輩S氏から、馬上から三つの的を射当てるには十年の経験が要るという話を聞いて、はじめ考えていた半年ぐらい東京に下宿し

てでも練習に専念すればよいのではないかという考えを捨てて、一年か二年の間東京近くで職につき、腰をすえて流鏑馬を習うことにした。鎌倉へ引越してから、弓馬を練習できる条件にかなった職場を捜したが、ちょうど三浦市三崎のもと乗船していた船の水産会社から事務所の方をぜひ手伝って欲しいと求められたので、かって知ったる船の仕事でもあり、弓馬の行事の時は会社を休みますよ、ということを唯一の条件に就職した。

小笠原教場の練習日は毎土・日曜である。弓馬術礼法の名前のとうり、弓術（歩射）と馬術（騎射）と礼法の三部門があって、そのどれでも好きなものを習ってよい。但し女性は騎射はできない。九月十六日は恒例の鎌倉鶴岡八幡宮例大祭の流鏑馬神事があり、入門の頃はその期日も近づいていたので、騎射の練習には特に熱が入っており、騎射歴三十年ー二十年の人三、四名を中心に、例年出場する十名ばかりのメンバーが毎週顔を合わせて練習に励んでいた。練習は和鞍をつけた回転木馬にまたがり、腰帯にさした矢をひきぬいては的を射るもので、馬のスピード感を得る為に、この木馬は胴体の中心を軸として人が押せばぐるぐる回転するようになっている。乗馬下馬は、洋鞍と違って和鞍では右からやる。手綱は出発点でぱっと放して、あとは三本の矢を射終ってから最後に止める時に、手にとってひっぱるという単純な操作だけだ。馬上で弓を引く型を地上でやる騎射体操というのがあり、これはなかなか辛いものだ。八幡宮の本番にそなえ、八月下旬には十数名で福島県原の町で合宿をした。ここは雲雀ケ原の相馬野馬追いで有名なところで、農家には、年に一度の野馬追いに使うためだけに飼っている馬が残っていた。この合宿の目的は主に馬上感覚に慣れる為だそうだが、疾駆する馬上から物を狙って当てることは、動揺が激しくて難しいものだということが実感として解った。馬の反動を受けない様に、立ち腰になる〃立ち透かし〃という乗り方を体得する事が、射上達の要点だと思う。この合宿参加者の中から九月十六日の射手十三名が選ばれた。このうち流鏑馬射手は三名で、藺で編んだ綾藺笠を被り、鹿皮の行縢をはき、太刀を吊り、背中に負うた箙に鋭い雁又の鏃のついた矢をさす。神宮より厳かに命名を受けて神事にあづかる。いわば当日の主役は三人ともこの道二十年以上のベテランばかりだ。残り十名は平騎射の射手で、馬上から三つの的を射ること及び左腕に射ごてというものを着けるのは流鏑馬射手と同じだが、竹で編んだ騎射笠というのを被り、矢先きに丸い木の神頭というものを取付けた矢を誇の帯に差し込んだだけの身軽な装いをしている。この平騎射の射手に入門後僅か一と月余りで入れてもらえたのは非常な幸運だった。八幡宮の馬場は巾五米長二百五十米、途中三ケ所に方形の杉板の的が立っており、ここを十八ー二十二秒で駈ける間、三本の矢で

三つの的を射当てるのである。馬場の中央に巾二米ぐらいで杭を打ち綱を張ってあり、馬はこの二本の綱の間を　ける。足場の悪いところには砂を入れてある。

さて九月十六日初陣の当日は、的の前後数米を除いて、馬場の両側には見物人がびっしりつめかけていた。祭り太鼓の囃きが、五頭の馬と十三人の射手の血をいやが上にも湧き立たせた。最初に流鏑馬の三騎が美事な演舞で三つの的を射当て、観衆の間から的中の度にどっと歓声が上がった。流鏑馬の三人が終ると、平騎射の一番射手としてすぐ自分の番になった。出発点の馬場元まで引き馬してもらい、引き締めていた手綱をパッと放すと、馬はすぐ　け足になった。「インヨォーッ！（陰陽）」と腹の底から掛声をかけて、弓を正面へうち上げ、第一の的を見ながら弦をひきしぼり的が通り過ぎる瞬間サッと切って放つと、バアンーと音がして的が割れた。同時にドッと上がる歓声。腰の矢を引き抜き、掛声をあげながら矢つがえをして二の的に迫る。放つー歓声！すぐ三の的に目をつける。インヨォーッ　〈〈〈〈〈〈〈〈と高く力強い雄叫びをあげつつ矢つがえ、放つ！歓声。弓手で手綱をとり、すぐ右手をそえて両手でぐっとい　を引き締めて馬をピタリと止めると、そこはもう馬場末だった。夢我夢中の二十秒間だった。三つとも的中した事は喜しかった。

十一月には水戸の笠間稲荷の流鏑馬に出たが、一の的を射外して二中。翌四十六年四月の九州宮崎神宮でも同じく一の的を外し二中だった。昭和十五年に紀元二千六百年を記念して作った宮崎神宮のやぶさめ馬場は、両側に広い芝生が植えられ、走路には細い砂をしきつめた名実共に日本一の馬場だったが、第一回から三十年にわたって出場している地元の五人の射手は皆年配の人ばかりで最年長は七十三才の日高老人であった。宮崎大学馬術部から馬を借りたので、馬術部から数人の学生が来て馬のめんどうを見ていたが、宮崎神宮の流鏑馬の伝統は近い将来、大学生に引き継がれる可能性は大にあると思う。昨年の二度目の八幡宮の流鏑馬では、本番のとき二回ずつ出場したが、一回目は一の的を射外し、二回目は二の的のとき　のワキに矢先きをちょっと引っかけ、これを外して矢つがえを終った時は的は遥か後方へ射程を離れていて射ることが出来ず、二回とも二中だった。更に十二月五日には淵野辺の米国キャンプの馬術大会へ招待されて披露した。この時は二回出場して二回とも全部当てた。青い目の観衆は的に当るとビューッ！と口笛を鳴らしてハデに反応する。二回とも小柄な黒い馬に乗ったが、その馬はあまり人を乗せたことのない、乗馬クラブでは名うての悪馬だということで、クラブの人たちは、我々がその馬を手綱を放して真っ直ぐ二百米も　け続けさせることに驚いていた。我々は本番の前には、前日よりその場所で、実際に弓矢を持ってその馬を　けさせ、馬を慣らしておく。だから手綱

を放すととたんに　足を止める馬とか、埒綱を切って走路からとび出す馬とか、どうしてもその癖をなおすことが出来ない馬は、本番には使わぬことにするのだ。この黒馬については、前日の厳しい練習の結果、どうやら本番に使えるところまでもっていけたのだった。

鎌倉、笠間、宮崎と全国の神社を飛びまわり、妻からは〃お祭り男〃の異名を頂戴して、好きな弓馬に夢中になって過ごしてきたが、この間長男が生まれて満一才の誕生日を迎え、まもなく船を下りてから満二才になろうとしている。流鏑馬という源頼朝以来の伝統のほんの基礎を学んだにすぎないが、いちおう初期の目的を達したので、そろそろ馬を漁船に乗りかえて、広い海にマグロを追っかけてみたいと考えている。勿論、流鏑馬は生涯の道楽として続けるつもりだ。

昭和47年3月1日

鎌倉にて

荒木伸也

39年卒

40年　水産学部遠洋漁業学課

特設専攻科終了

学生馬術の限界

八木正己

先日（一月十日）、市内在住の帯畜大O・B、酪農大O・B、北大O・B計十二名が「いろは東店」に会し、肉なべをつつき、酒を酌み交しながら技術談義に花を咲かせました。出席O・Bは、私より一、二年上のO・B以下の若手でしたが、半沢先生にも若手として出席していただきました。

きっかけは、各大学の市内在住O・Bも多くなったことだし、また本道馬術界が必らずしもいい方向に向っていないということで、帯畜大O・Bの山下君、酪農大O・Bの鶴林君から発案があり、それじゃあということで呼びかけたところ、十二名もの人が集まってくれました。

このような集まりは、全く初めてのことで、特別な話し合いはもたれなかったが、今後も続いて欲しいものです。

そのとき出た話では、まず帯畜大O・Bの「最近の北大は弱くて困る。なぜかというと、今のところ帯畜大もまあまあの成績をあげているが、これは他がレベルダウンしたためで素直に喜べない。他がもっとレベルアップしてくれないと帯畜大も弱くなり、本道馬術のレベルも下る一方である。特に帯畜大は過去において北大の胸を借りて強くなってきた。そういういきさつから云っても北大には特に強くなって、覇を競ってもらわないとさびしい。」には一言もありませんでした。

また、「学生馬術には自ら限界がある」ということ。これは、

特に本道学生馬術にあっては、一般に大学四年間という制約の中で馬術を修得し、馬を調教し、競技に参加しなければならない。従って、複雑な馬術を要求すると往々にして失敗するし、また単純明解と思われても具体性を欠いた馬術であってはもちろんいけない。実状に即し、単純かつ明解で、具体性に富んだ練習方法、調教方法が確立されてはじめて、本道における学生馬術は成り立っていく。その上でより以上の馬術を求めるもよし、真の馬術家たらんとするのも自由である。しかし、現状ではこれは、卒業後に結びつけるのが無難であり、またこれを現役部員に押しつけるのは危険である。

というのは、本道において現状では、卓抜したコーチを求めることも困難であるし、学生の乗る馬を調教する人材を期待するのも、種々の制約があって無理であり、そのため良く調教の出来た馬に乗って、馬術を体得することも難しい。いきおい学生馬術の限界を冷静にみつめた上で、実状に即した正しい判断を下さなければならない。大学四年間では、最も重要である馬術の基礎（基本原則ー馬の従順と推進気勢）の修得に努め、馬が持てる能力を最大限発揮できる状態にもっていく方策を探求するだけでも相当な努力が要求される。人の姿勢、性質その他が様々なように、馬の体勢、性質等も様々である。しかし馬に対する基本的な要求は同じであり、その時、馬の体勢、性質等を考慮し、それに対応していくことが大切である。

馬の反抗（障害の拒否、逃避等）は、主として推進気勢不足と騎手の未熟からくる調教の失敗以外の何ものでもない。馬が悪いのではないのである。どんな馬でも新馬の時には、ほとんど障害を嫌わずに飛越することから考えてもうなずけるでしょう。

そこで、騎手が未熟であっても、現実に馬の調教はしなければいけないという場合、特に自由飛越、調馬索による調教も、騎手に馬の運動が妨害されないで、馬の障害順致、飛越が行われ、はみ受けも覚えるという点で重要な方法である。ただし注意深く行われなければいけない。

騎手が、馬の運動を妨害しないでなお推進気勢を保つには、しっかりとした騎座と柔軟なこぶしが要求される。しっかりとした騎座即ち安定した騎座は、正しい姿勢で鞍上に座し、馬上での平衡（バランス）を鐙によらないで得ることによって獲得される。

以上、まとまりのない内容になってしまいましたが、馬術部を存続させるのは、常に現役部員であって、O・Bではありません。しかし、O・Bはいつも部の状況を見守り気を使っております。

馬術部に期待する

佐合義弘

私と馬術部の縁は、大久保君が主将をしていた昭和三十年だったと思う。私が同好会に入った当時の馬場はまだ蹄跡引外の所は草が青々としていた。秋になると工学部の裏手の貯岩場に石炭を搬ぶ引込線に汽車が練習中に通過して馬が驚いて立ちあがり落されたものもいた。その思い出多い馬場から新馬場に移り厩舎も新厩舎になりまさに心機一転のチャンスかと思う。実は私自身も今年一年をふりかえって見ると市民生協に移籍以来仕事の方が多忙で馬とはこゝ数年御無沙汰していたが、昨年の秋頃から少しひまをつくって馬術部との関係を若干なりとも挽回しようと努力している積りです。この努力も実は馬術部に対する期待でもある。私が部に対する期待はこんな事です。それは、第一に馬を中心に団結し固い人間関係を構築する事、第二にやはり運動部であるからには良い成績を残す事、その為には一に練習二に練習、ともかく基本にもとずく練習だと思います。きびしい練習そして暖い人間関係こそが勝利えの第一歩だと思います。今年こそ本願を発揮してほしいと期待して止まない。

札幌陸運局認証工場

北大モータース

小野　忠

世紀の名馬ノースクイン号にも
御期待下さい。

札幌市北18条西5丁目
TEL (711) 2076

先輩諸兄からのお便りを紹介します

昭和十一年卒　大迫明徳

いつも御連絡を載き有難う御座居ます。
新馬場新廐舎の落成御目出度う御座居ます。更に新しい気持で張り切って御活躍の事と御察ししします。小生昨年七月で定年に達し左記の様なささやかな事務所を自宅に構えました。引続きバイエルジャパン㈱の技術顧問をして居ります。乗馬には少し縁が遠くなっていますが機会があったら又乗ってみたいと思っております。
皆様の御健闘を御祈りします。

昭和十四年卒　池内武夫

昨年から心掛けを改めて、土曜、日曜は都合のつくかぎり馬事公苑で乗せてもらっていましたが年末のインフルエンザでストップになりました。馬事公苑も福島競馬場も何れもその発生に馬術大会が絡んでいるのは皮肉なことです。乗馬普及と獣医関係、それに競場関係を兼任する私としては大変複雑な心境です。幸に馬事公苑で乗れる日も間近かですし、競馬の再開も二月末と決めましたのでヤレヤレと愁眉を開いたところです。近況御知らせまで

昭和十六年卒　高木史朗

近況

私の勤務する波崎高校の所在地は利根川の河口、銚子市の対岸にあって、東は鹿島灘に面し、細長い刀の刃先のような町です。
鹿島港、鹿島臨海工業各企業の要員養成のため昭和三十九年創立、現在普通科、機械科、電気科の併設校です。
鹿島の開発軌道に乗り、あと、三、四年すれば人口四十万都市になります。

昭和三十年卒　正富宏之

昨年の馬場開きのときは入院中であったため参ることができず残念なことをいたしました。
今年は新しい馬場で一層の御精神をお祈りいたします。
なお住所が昨秋から表記の如く変わりましたのでお知らせいたします。当地方へおいでの節などお立寄り下さい。

近況報告

昭和三十一年卒　加藤　昌太郎

このたび陸上幕僚監部での「OR幕僚」を最後の勤務として防衛庁を辞し、財団法人「日本総合研究所」に転じました。官界や財界の「ヒモ」のついていない理想のシンク・タンクで、日本を代表する研究所です。
どうぞ御気軽にお出で下さい。

科学部次長　加藤　昌太郎
千代田区平河町二ー十六　（北野ビル）
電話（〇三）二六五ー二三七一　十五
内線　三五六

昭和三十五年卒　田中　紀介

御無沙汰して居りますが皆様お元気の様子何よりです。
小生十年くらい馬に触れていませんが、部報は何より楽しく拝見しています。
皆様仲よくやって下さい。

昭和四十年卒　吉田　賢一

拝啓、新馬場、移転おめでとうございました。私達O・Bには、古い場馬にはいろいろ思い出があります。私達が存部していた頃も、すでに馬房は、そうとうがたがきておりました。パドックの柵の修理、馬場のラチの修理は日常でしたので、いつかは移る必要があるものと思っていました。馬場の横、今は道路になっておりますが、前、鉄道の引込線があったことを御存知の人は少ないものと思われます。秋口には今流行のS・Lが石炭を満載し通過して行ったものです。オリンピック以来、日本の馬術熱もさめたかのように思われますが、最近横浜で民営の馬術クラブがぽつぽつできております。一時間平日で一千五百円、休日で一千八百円だそうです。今度一回のぞいてこようと思います。部員の方には、冬場、ボロ出し等、つらい毎日とお察しします。キャンパスに緑がそみがえり、一面にタンポポの咲く日も遠くないものと思われます。がんばってください。

卒業年度　氏名不明

前略

新しい馬場の完成おめでとう御座居ます。長い間大学当局と忍耐強く交渉に当たられた半沢先生の御苦労と部員諸兄の熱意の賜とおよろこび申し上げます。旧馬場の憶い出など書こうと思って居るのですが筆がのろく間に合いそうもないので取敢ず本状を御返送致します。引大馬術部も自馬三頭を持ち部員も増えようやく形が整って来ました。今後よろしくお願い致します。馬場の移転問題は一番の悩みで移転先を探しています。

北大馬術部の御発展を祈ります。

尚お、染谷五郎氏、武田朝男氏、桶本勝登氏、松平悌氏、中曾根賢氏、羽島栄治氏、千葉幹夫氏、山本智氏、荒木伸也氏、池田統洋氏、から激励の御葉書をいただいております。

お便りどうもありがとうございました。

部員一同

北海道大学馬術部名簿

歴代部長

氏名	住所	電話	勤務先
永井　一夫	初代部長　札幌市南2条西12丁目	211−2435	北大名誉教授
高松　正信	第二代部長　東京都世田谷区松原6丁目36−8	322−6752	
黒沢　亮助	第三代部長　札幌市北1条西22丁目	611−1057	（江別市）酪農学園大学教授
太秦　康光	第四代部長　函館市湯川町2の8		函館高専校長
松本　久雪	第五代部長　物故		
半沢　道郎	現部長　札幌市北6条西12丁目	221−2268	

特別後援会員

氏名	住所	電話	勤務先	電話
野間口英喜	東京都杉並区永福町335	321−7617	日航ホテル社長　川崎日航ホテル社長	571−4911
染谷　五郎	札幌市豊平3条4丁目	811−8456	染谷商会社長	811−0628
滝沢　政雄	旭川市パルプ町1条4丁目国策パルプ第一クラブ内		日本造林社長	
原島　つる	札幌市北2条西27丁目	621−1451	原島洋裁学院長	
庄内　貞夫	〃　白石中央53の3	861−2504	歯科医	
武田　忠幸	〃　南6条西20丁目	561−3286	北都ハイヤー、北都バス社長	711−7214
小野　忠	〃　北18条西5丁目	721−1526	北大モータース社長	
片寄　馘	〃　北18条西6丁目　静山荘			
富樫　英治	〃　北3条西16丁目	621−3840		
佐合　義弘	〃　琴似町8軒3条東3丁目651	631−5744	札幌市民生活協同組合理事	
高橋留次郎	〃　北14条西9丁目札幌競馬場内		日本中央競馬会札幌競馬場	
加藤　和男	東京都太田区南馬込6丁目29番一1号			
田中　昭志	札幌市北17条西15丁目　佐藤マンション2号	731−8489	札幌鉄道管理局	
岡沢　尹大	〃　南1条西23丁目　米屋方	611−9558	北大理学部高分子溶液物理学教室	
沢田　八衛	〃　北9条西4丁目		沢田商店社長	
酒井　保	〃　北27条東8丁目		北大獣医学部教授	

氏　名	住　所	電　話	勤　務　先	電　話
堀内　寿郎	札幌市北9条西5丁目		北大学長	
大木　叡	〃　北14条西19丁目札幌競馬場		日本中央競馬会札幌競馬場長	

卒業生

氏　名	卒業年度	住　所	電　話	勤　務　先	電　話
中野友二郎	昭4 農農	南多摩郡多摩町桜ケ丘3丁目33の4		科学教育研修センター	
平山　常介	4 工機	横浜市鶴見区獅子ケ谷町1222の19		日本海事業興業	
中谷　勝紀	5 工機	杉並区桃井1－15－23		飯野重工業	
間　克一	6 農畜	千葉県葛飾郡鎌ケ谷町初富522		地方競馬全国協会参与	
岩垣　駛夫	6 農農	神奈川県川崎市生田字塔ノ越6983		東京農工大学教授農学部園芸学研究室	
河崎　秋三	6 農畜	八王子市高倉町1552		東京都八王子市競馬場	
永松　四郎	7 農畜	太田区千束町1－58－9	717－3484	永松商事	
半沢　道郎	8 理化	札幌市北6条西12丁目	221－2286	北大農学部教授	
武田　朝男	8 農畜	目黒区中目黒5－18－2	714－7015	日本製酪協同組合	
東園　基文	9 農農	目黒区五本木3－30－1	711－8877	宮内庁待従職参事	
（7主） 田畑　武夫	10 医	札幌市南5条西2丁目		田畑産婦人科院長	
植村　勘一	10 農畜	目黒区鷹番町45	712－0390		
（8主） 本田　桓康	10 工機	千代田区紀尾井町4の11	262－5524	プレス工業KK常務取締役	
加藤　英夫	11 医	不　明			
脇田代子郎	11 農化	神奈川県藤沢市辻堂西海岸6366			
（10主） 大迫　明徳	11 理化	世田谷区宮坂1丁目14－9	428－4817	バイエルンジャパン	
吉見　一郎	11 農教	北多摩郡狛江町小足立620	489－0491	雪印乳業KK取締役	853－3111
渋谷　周平	11 農畜	渋谷区代々木1－22		日本アイスクリーム協会	
森山　武雄	12 医	青森県南津軽郡浪岡町		国立岩木療養所所長	
滋賀　秀明	12 医	港区白金台5－3－20		大同製鋼KK東京診療所長	901－4169
小村　達夫	13 農生	岡山県吉備郡足守町足守861		岡山大学教授	
前川　静彌	13 理化	室蘭市新富町1の6番14号社宅番外14号		日本製鋼室蘭製作所	

氏　名	卒業年度	住　所	電　話	勤　務　先	電　話
山下　正亮	13 農畜	札幌市白石町本通813－135		酪農学園大学教授	
(12主)					
石井　昌長	13 農化	千葉県船橋市夏見台町夏見台団地14－10		アルコール海運倉庫KK	
小笠原義顕	13 工電	川崎市宿河原2223		旭電気KK	
桶本　勝登	13 農経	杉並区西荻北2の27の8ライオンズマンション西荻第2D－608		中央技能検定協会監事	
松平　悌	13 農農	神奈川県秦野市鶴巻963－18	77－2116	サッポロビール	
黒沢　良雄	13 農経	茅ケ崎市浜竹4－6－30		日本長期信用銀行	
小田　昇	14 農畜	目黒区上目黒3の44の19の205		ホテルカスガ社長	
池内　武夫	14 農畜	世田谷区若林4－22－5	414－0361	日本中央競馬会	
(13主)					
中尾　敦司	15 工鉱	船橋市習志野台1の964－8		大日本鉱業	211－2671
西村　雅吉	15 理化			北大水産学部教授	2－0311
(14主)					
大谷清吾貞	15 農実	金沢市片町2－2　20号木谷ビル	21－5041	瓦土建	
石井　和彦	16 農畜	鳥取市場所町1の307		鳥取大農学部教授	
(15主)					
河原　清作	16 工土	小樽市忍路町塩谷村		目　営	
熊沢	16 農実	十勝国河東郡士幌町士幌		士幌農協	
関　義人	16 医	秋田県湯沢市西松沢392		関内科小児科医院	3200
高木　史郎	16 工鉱	茨城県東茨城郡茨城町大字駒渡1244		波崎高等学校校長	3377
中曾根　賢	16 農実	札幌市菊水上町46		北海道農務部酪農草地課	
林　健彌	16 農実	札幌市手稲福井49－13		ホクレン	
半沢　宏	16 工機	札幌市北6条西12丁目	221－2286	北大工学部教授	
伊関　悦郎	16 工鉱	函館市宮前町213		函館水産高校	
門池　正夫	16 農実	名古屋市千種区丸山町3－24		旭化学工業KK	
秋吉　照忠	16 農林	札幌市真駒内曙町1－1－1	581－0415	北海道合板工業組合	241－5845
福光　幸彦	17 医	札幌市南7条西4丁目	231－1843	福光延寿堂院小児科	251－8211
岡田　光夫	工木	札幌市南7条西22丁目	231－3750	札幌市役所土木部長	561－4750
(16主)					
石川　恒	農畜	札幌市北28条東3丁目		北大獣医学部教授	
白鳥　善三	17 農実	弘前市大字薬師堂町字熊木19の2		大成解ブロックKK社長	
小林　五郎	工電	神奈川県中郡大磯町東町2の64		沖電気工業KK特殊機器開発部次長	
山根　乙彦	農畜	鳥取市湯場所町2の422		鳥取大学農学部教授	

氏　名	卒業年度	住　所	電　話	勤　務　先	電　話
前田　正義	18 農実	不　明		雪印乳業名古屋マーガリン工場長	
大戸　進	農林	不　明		三井木材KK砂川工場長	
小池　栄一	工土	札幌市藻岩下475	581—2290	北海道電力札幌支店土木課長	
平井　宏和	工電	東京都町田市玉川学園8－18－9		日本電気衛星通信開発室	
安部　孝	19 工電	〃　小金井市貫井北町3－19－5	81—4100	高見沢電気製作所	
坂井　弘	農化	不　明		農林省中国農業試験場	
田口　暢茂	医	札幌市北22条東18丁目		道立千歳病院	
稲葉　恵一	農化	大阪府高槻市天神町2の16の15	5—2759	日本油脂KK	
福岡　邦泰	農農	岩見沢市6条西5丁目		道庁総合開発企画部開発計画部長	
大手　英夫	19 理化	新宿区西大久保2－219	365—4528	東邦シートフレームKK	
富塚　治郎	20 農畜	東京都青梅市新町都立種畜場内		東京都立種畜場	
岸田高三郎	農化	不　明			
羽島　栄治	工土	名古屋市千種区朝日が丘29	052-771-3513	日本鉄道建設公団名古屋支社	
小林　正英	農畜	東京都杉並区阿佐ケ谷北3－26－10	339—0869	東京都農業試験場	
木全　幹雄	21 農化	〃　杉並区清水1の6－8		自衛隊陸上幕僚監部	
山崎　治雄	工治	布施市西堤623狩勝工業		大阪市城東区放出町2179狩勝工業	
宇津見千之助	農畜	栃木県小山市横町2206			
上野　新次	22 農農	新潟県加茂市赤谷		県立加茂高校	
和田　晴	農畜	不　明		宗谷支庁経済部長	
宮崎　利昭	工機	在ペルー		第一物産KK	
武田　祐幸	理地			国際航業KK地質部長	
田之上家久	26 農水	東京都三鷹市牟礼公団住宅三鷹合団地10の104		日本放射線同位元素協会	
後藤　義英	農獣	札幌市円山西町2097		札幌市環境衛生事業所長	
斉藤　善一	農畜	弘前市若党町79		弘前大学農学部教授	
鈴木　敏夫	農畜	不　明		江部乙高校	
渡植貞一郎	農畜	名古屋市千種区不老町		名古屋大学農学部畜産	
鳶野　保		北海道標津郡中標津		北海道農業試験場根室支場	

氏　名	卒業年度	住　所	電　話	勤　務　先	電　話
永井　重翁	農獣	水沢市新小路２番地雪印乳業KK水沢工場		雪印乳業KK水沢工場	
梶谷　晴男	２６農水産	西宮市津門西口町９番１５号		大阪化学合板KK	４８１－４４３３
古谷　昌司	農畜	浦和市別所３－３８－１０	(0488)22-5073	古谷製菓KK技術部	(0488)31-5873
(２６２７主) 下飯坂　隆	〃	中野区白鷺２－１７－３　和田方	３８５－３２６９	日本練馬登録協会	４２９－５６８４
佐藤　巌	〃	川崎市岡上５１０－２８		雪印乳業KK技術部	２６８－３１１１ 内線５８８
福島　務			６２１－０８５１	北大産婦人科教室	
阿部晃一郎	３０　工鉱	不　明		住友金属鉱山新居浜市端出場	
鎌田　正人	農畜獣	浦河郡浦河町西幌別	浦河　３－２８４	KK鎌田牧場	
(２８２９主) 田中　浩	工冶	不　明		神戸製鋼KK	
正富　宏之	理動	美唄市東５条南７丁目		専修大学美唄農工短大	
斉藤　成俊	３１　農経	札幌市北１条西３０丁目　円山公宅３号	６２１－４７７０	北海道信用農工連	
佐伯　和夫	獣	白老郡白老町萩野第三石山		昭和工業KK	
(旧石塚) 大久保利彦	〃	札幌市本町１条３丁目４の９		雪印乳業KK	
(３０主) 加藤昌太郎	３１　理物	国分寺市西町４丁目けやき台３２－１０３	(0425)22-0696	防衛庁陸上幕僚監部	
加藤　元	獣	杉並区久我山３－７－２７	３３４－１２８６	ダクタリ動物愛護病院	３４４－３５３６
千田　哲生	〃	東京都調布市小島町６３４		中央競馬会競走馬保険研究所	
岡本	農生	草加市草加松原団地４丁目Ｄ５８－２０４	(0489)-39407	十条製紙KK東京事業所	
荒川　清	３２　経	札幌市界川町４９５	５６１－４６７２	札幌トヨタ自動車KK	２６１－３２１１
榎本　幸人	理植	淡路島津名郡淡路町岩屋神戸大学理学部岩屋臨海実験所		神戸大学	
岡部　満雄	農畜	不　明			
斉藤　実	経	不　明		不二越鋼材工業KK	(045)731-1261
宮沢　寛	農林産	逗子市山ノ根３－１２－１０	(468)71-2487	日本揮発油建設部	
(３１主) 伊藤　亮	３３　獣	盛岡市下厨川穴口７２の１		農林省岩手種畜牧場巣子牧場	
松田	医薬	静岡県三島市谷田国立遺伝学研究所内		国立遺伝学研究所	
乾　直道	理動	藤沢市辻堂新町２丁目４の２２	(0466)36-7162	癌研究所病理部	
栗原　康	工鉱	不　明		通産省貿易振興局経済協力部技術課	
渡辺　俊弘	工応化	上尾市大字上字堤下３５９上尾シラコバト公団アパート１７－４０１		北岩化成工業KK	

柴田　久男	34　工電			661−8709	北海道電力火力部火力工事課	
今田　哲	農化	兵庫県西宮市甲東園２−８５　武田薬品研究所			武田薬品KK	
生田　勝一	経	不　明			読売新聞報道部	
(３３主)
菅原　照雄	文哲				毎日新聞	
土井　敦	農畜	不　明			ホクレン生乳課	
山本　智	水	斜里郡小清水町字小清水６９３番地（７区）				
粟津健太郎	水	札幌市南１条西１７丁目		621−0701	銀座屋（製パン業）	
村山　哲	経	岡山県倉敷市浜ノ茶屋１丁目５の２２			本田技研工業倉敷営業所	
樋口　正明	法法	東京都世田谷区上馬５−２３−８			東京都衛生局医務部	(212)5111 内2582
(３２主)
千葉　幹夫	獣	東京都世田谷区上用賀２の１の１			中央競馬会馬事公苑	
中村　美幸	経経	東京都中野区鷺宮６−１９−１９		999−2443		
佐伯　雄二	35　農畜	群馬県館林市大字成島２５４４森永住宅			森永乳業KK	
本橋　幹久	農畜	サンパウロ在住				
奥野　静子	文英	札幌市北２条西２３丁目　片山方		611−8414		
(旧片山)
小長谷善高	水	長崎市西坂町１番地　ＮＨＫ長崎放送局			ＮＨＫ−ＴＶ放送部	
田中　紀介	農林産	静岡県清水市宮代町６			富士合板KK研究所	
長谷川邦夫	法法	立川市砂川町６９２　江の島東団地２５０			岩崎通信機KK経理部	
門奈　駿	医	茅ケ崎市旭ケ丘１３−４		(0467)82-5746	国際興業航空サービス部	
森本　悌次	農林産	東京都葛飾区高砂７−１−１４　好美荘				
(３４主)
| 稲垣　修一 | 36　理化 | 愛知県知多郡阿久比町白沢みのかけ１０の１０ | | | 大同製鋼KK | |
| 佐藤　典子 | 医 | アメリカ留学中 | | | 北大病院第２内科 | |
(旧佐藤)
| 高林　雄子 | 医 | 横浜市磯子区岡村町２３８ | | 751−4431 | 虎ノ門病院 | |
(旧高橋)
河原　紀夫	理地	不　明			アジア航測KK	
湯浅　正之	農畜	武蔵野市西窪４１１　伊藤忠三鷹寮０４２５−５０の５			伊藤忠商事KK畜産課	
吉田　享	工衛	八王子市打越町７１５−２０３			高砂熱学工業KK技術部	
千葉　祐記	37　農畜	東京都新宿区本塩町１３番地雪印乳業販売促進部調査課内				
(３６主)
| 広岡　暢夫 | 農畜 | 茨城県西茨城郡岩間町全販連内 | | | 全販連 | |
| 森　弘津 | 工精 | 名古屋市北区辻町２の３６　大隅鉄工所第一寮 | | | 大隅鉄工所 | |

氏　名	卒業年度	住　所	電　話	勤　務　先	電　話
四柳　智久	医薬	不　明	717−8095	東大大学院（薬学部）	
木塚　信次	農畜	東京都杉並区久我山3−2−24		湘南食品KK研究室主任	
伊藤　公一	医	虻田郡倶知安町北4条東1丁目　倶知安厚生病院		倶知安厚生病院	
大場　善明（35年）	文史	東京都足立区栗原町1555　栗原団地14−104		読売新聞広告部	
鶴見　好博	理化	不　明	764−3970	三菱江戸川化学KK研究所	
小島　杏介	水	横浜市神奈川区菅田町2872		淀橋保健所	
小山　毅	教	東京都中野区南台5の27の1の134	384−1765	専修大学文学部	
市川　瑞彦（37年）	38　理物	札幌市北13条西4丁目　久道方	731−0921	北大教養部物理学教室助手	
小出　秀通	医	帯広市外鈴蘭国立十勝療養所		国立十勝療養所	
宮崎　健	文露	横浜市北区日吉町128産経日吉住宅		産経新聞	
玉沢　一晴	医薬	埼玉県南埼玉郡白岡町大字上野田1013の2	(0488)82−3436	山之内製薬KK中央研究所	
岡田　征至	38　法	札幌市大通り西26丁目		北海道拓殖銀行　馬喰町支店	
志水　一允	農林産	横浜市港南区日野町57の1藤ケ沢住宅6−408		農林省林業試験場	
清水　洋	農畜	横浜市港南区日野町大多良住宅10−104		畜産局食肉鶏卵課	501−3766
原　重一	農農	神奈川県相模原市上鶴間3558		交通公社調査部	211−3211
堀川　芳男	農畜	東京都中野区上高田2−16−9	385−8685	アメリカーナコーポレーション日本支社	
実吉　峯郎	医薬	不　明	461−5550	国立ガンセンター研究所	
新原　輝久	理地	東京都北多摩郡狛江町泉1284		国際航業KK	
田中セツ子	農工	東京都世田谷区玉川奥沢3の121	702−1365	高千穂交易	
恩田　正臣	39　農畜	群馬県勢多郡富士見村小暮2425　群馬県畜産試験場		農林省群馬畜産試験場	
横沢喜美子（旧入江）	薬	東京都杉並区清水3丁目15の2			
小林　則子（旧寺江）	農畜	札幌市北36条東6丁目		天使女子大	
田村　雅英	39	八王子市大和田町1400小西六大和田寮			
高木　佑太	39	沼津市牛臥3004の6			
荒木　伸也	39	鎌倉市十二所98　十二所アパート			
三浦清一郎	39				
小島　武	39	神戸市兵庫区山田町上谷上字上ノ開地42の30			

八木　正己	40　理生	札幌市琴似町発寒962－20	661－1478	札幌市役所公園課
（38主）				
野田　行文	40　獣	東京都練馬区中村3－36　中外製薬中村寮		中外製薬総合研究所
大木　誠示	40　理数	不　明		ユニックKK
吉田　賢一	40　工冶	横浜市港南区大久保町599－2　第2北斗寮		日本揮発油KK
（旧御坊田）				
守屋　正	40　工精	東京都太田区田園調布2－40　第一桜ケ丘寮		三菱重工KK東京製作所
萩原　雅典	40　経			日立製作所
滝沢南海雄	40　理植	旭川市	751－1303	北大理学部大学院
（39主）				
松永　武彦	40工電子	東京都小平市学園西町1211日立平橋社宅D－14		日立製作所
水野　佑彦	40　理化	札幌市北29条西5丁目　めぐみ荘		北大結核研究所助手
横田　肇	40　農化	東京都東村山市栄町3の31の8　渡辺荘		明治乳業
菅野　弘	40　農畜	室蘭市幸町119　胆振支庁		胆振支庁農務課畜産係
大沢　龍子	40　薬薬	新潟県新潟市関屋田町2－42		
（旧姓牧）				
滝沢　迪子	40文独文	江別市大麻高町25－9		北大文学部助手
松尾　英彦	41　水産			日魯漁業
八木多賀子	41　文哲	札幌市琴似町発寒962－20	661－1478	
桜田　瑳子	41　法法	札幌市北10条東8丁目		北大法学部助手
（旧大塚）				
黒沢　道雄	41　工機	埼玉県朝霞市293－24		
髙野　文彰	42　農農	アメリカ留学中		
小栗　紀彦	42　農畜	札幌市北39条西5丁目	721－7916	北大農学部助手
（40主）				
近藤喜千郎	42　文史	名古屋市中区大須3丁目31－28		
髙橋　昭夫	42　獣	野付郡別海町別海農共家畜診療所内		野付農共家畜診療所
八木沢守正	42　理生	東京都目黒区大橋1－8－5目黒第5コーポラス2FL205号		協和醗酵
山村　勝	42　農林	山形県長井市宮1122		西置賜地方事務所
加藤　正昭	42　工衛	帯広市大通り8丁目	3－8121	
（41主）				
田中	44　医	不　明		
阿部　勝彦	43　農林	東京都港区元麻布2の11の20大昭和製紙一本松寮		大昭和製紙株式会社
五十嵐　章	43　法	旭川市南4条24丁目		モービル石油
（42主）				
池田　統洋	43　工機	埼玉県上尾市原市6の965		東芝電機原子力技術プラント一課

氏　名	卒業年度	住　所	電　話	勤　務　先	電　話
入江　圭	43　工衛	東京都世田谷区成城町2丁目6番地13号		東京都庁	
高倉　宏輔	43　獣	横浜市磯子区原町11−1　動物検疫所磯子寮		別海町農業共済組合	
降旗　正忠	43　工電	千葉県船橋市山手2−3−34　三菱電機船橋寮		三菱電機	
狩野　和子	43　教	小樽市桂岡町274			
（旧仙波） 山本　紘明	43　経	大阪市枚方市牧野本町1丁目35番地19−13		三洋電機審査部鑑査課	
浜岡　秀洋	43　工機	大阪府寝屋川市東大利6−5　浜明男方			
斉藤　勝雄	44　農機	札幌市澄川12	831−6281	ホクレン農業機械課	
田中　力	44　獣	岩手県花巻市桜木町2丁目　美晴荘		雪印乳業花巻工場	
春田　恭彦	44　農畜	札幌市北24条西3丁目　加藤方		北大獣医学部学生	
（43主） 村井　弘一	44　農畜	不　明	3−7897	協同飼料帯広サービスステーション	
山本　進	44　水化	北海道河東郡音更町土狩			
寺崎　弘恭	44	大阪府豊中市刀根山町4−98　近藤方		大阪大学在学中	
今井　雅子	45　農化	札幌市北3条西15丁目	631−1621	北海道てんさい研究所	
小野　政則	45　農林	豊橋市東雲町124−2		永大産業豊橋営業所	
加藤　公敏	45　理化	札幌市北18条西5丁目　五月荘	711−6844	北大理学部学生	
橋口　庸	45　医	札幌市北18条西5丁目　五月荘	711−6844	北大医学部学生	
本田　徹	45　医	札幌市北20条西7丁目　藤見荘		北大医学部学生	
（44主） 太田　清澄	45　農農	茨城県土浦市中貫25　日本住宅公団中貫単身宿舎		日本住宅公団研究学園都市開発局	
堤　秀世	46　獣医	札幌市北27条西21丁目			
中寺　清久	46　工機				
松井　亮	46　医	札幌市北26条西3丁目　成美荘	711−5461		
今井　敏郎	47　理化	札幌市北3条西15丁目	631−1621	北大理学部学生	
大見　太一	47				
梶村　哲世	47　獣				
桝井　明	47　工鉱	札幌市北20条東4丁目　北沢方	741−3758	北大工学部学生	

現役部員

氏　名	学年	学部	学科	現　住　所	電　話	帰　省　先
田崎　拓昭	4	獣	医	札幌市北２０条西５丁目　中島方	７２１－０７５３	鹿児島県曽於郡末吉町岩崎８６１８
横山　豊昭	4	〃		札幌市北２０条東４丁目　北沢方	７４１－３７５８	兵庫県尼崎市友行字南吹上げ１３０－１４
西村正二郎	3	農・林		札幌市北２０条東４丁目　北沢方	７４１－３７５３	山口県宇部市厚南区妻崎
近森　憲助	3	獣	医	札幌市北１２条東２丁目　森田方	７４１－１７５３	高知市白石町３丁目７－３５
則近　　彰	3	文				岡山県岡山市西大寺邑久郷１６９１
南部　孝一	2	教・理		札幌市北２０条東４丁目　北沢方	７４１－３７５３	北九州市八幡区祇園原町８－１
景山　博文	2	教・文		札幌市北１７条西８丁目　北大恵廸寮	７１１－３４１３	東京都中野区九山１－１４－８
相川　宗厳	2	教・理		〃　　〃	〃	東京都練馬区早宮１－４４－１８
吉野　勝之	2	教・理		札幌市北２０条西７丁目　幌北荘	７４１－５８１７	大阪府茨木市大池２丁目１９－２１
佐伯久美子	2	教・理		札幌市北６条西１３丁目　北大女子寮	２５１－１９９１	香川県丸亀市塩屋町８２
江口　州志	2	教・理		札幌市北２０条東４丁目　北沢方	７４１－３７５３	長崎市若竹町１－１１
花谷　　驛	2	医	進	札幌市北３７条西４丁目　桑原方	７２１－８８２０	京都市左京区浄土寺下南田町７４
柴田　　好	2	医	進	札幌市宮の森３０６　杉田方	６６１－０６３５	愛知県東海市富木島町東通り１番地８の１０
小田　恭治	2	教・理		札幌市北２０条西７丁目　登別荘	７２１－２９２６	大分県日田市田島本町５－１４
宇野　浩三	1	教・理		札幌市北１７条西８丁目　北大恵廸寮	７１１－３４１３	大阪市城東区今津町２４７

千歳鶴
サービスステーション

札幌市狸小路5丁目角
電話（251）4660番

馬具鞄
製造販売修理

中野馬具店

札幌市北13条東1丁目　石狩通
TEL 711－8876

庄内歯科

院長　庄　内　真　夫

札幌市白石中央　五三の三

TEL（861）2504

乗馬用長靴
スキー・スケート・登山靴

各種靴製造と販売

札専加盟店　**三浦靴店**

札幌市南一条西八丁目八番地　T代（231）0901

太田装蹄所

札幌市菊水北十二
TEL (811)0851

一人でしんみり
二人で仲良く
みんなでゆかいに

昭和の春　直営
三　鈴
南5西4

ルパンⅢ世

アベックで,御一人で,大勢で
楽しめる所

281－5721
(代)　南4西4
すずらんビル

乗馬用ズボン専門店
松田屋

田辺洋服店

札幌市豊平四条六丁目平岸通り
TEL (811) 7341

最高技術と親切をモットーとする
乗馬靴の御用命をどうぞ

堤製靴店

名古屋市中区丸の内3の1
TEL (231) 2323

コーヒーとカレーの店

ゆうき

北大正門前

TEL731—0840

くらしと健康を守る

市民生協

札幌26店・小樽3店・旭川4店

御食事の店

定	丼	親	一品	ラ	味噌	お茶づけ	ビ	コ	お
食	丼	丼	料理	イス	汁	ケ	ル	ラ	酒
二〇〇	一五〇	一八〇	各種	六〇	四〇	一五〇	二〇〇	七〇	二〇

焼魚 各種

A.M.11:00 ～ P.M.12:00

北21条西5丁目

山小屋

北国

編集後記

思い出多い古い馬場ともおさらば、今、我が馬術部は新廐舎、新馬場のもとで新時代を築くべく日夜精進しております。いまや北大において、かのクラーク博士のボーインズビーアンビシアスの言葉になるフロンティアスピリットの精神を後世に伝え得るは北大馬術部のみと信じます。

そういった部員諸兄の息吹きが、この部報の各所に、にじみ出ていることと思います。この部報を通じ、先輩諸兄に少しでも部の闊達な雰囲気が伝えられればと願います。

最後に部報のためペンをとって下さいました先輩諸兄に御礼申しあげます。

部報小委員会

部報第一七号

昭和四十七年五月発行
発行者　北海道大学体育会馬術部
（札幌市北区北十七条西六丁目　北大体育会内）
編集者　部報小委員会
印刷所　北大生協プリント部

非売品